



大学教育再生加速プログラム

崇城大学 大学教育再生加速プログラム (AP)

SOJO University Acceleration Program for University
Education Rebuilding : AP

平成30年度 取り組み報告書

崇城大学
SOJO UNIVERSITY

崇城大学「大学教育再生加速プログラム」平成30年度報告書

目 次

I. 取り組み概要	1
I-1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等	1
I-2. 事業の全体像	2
I-3. 30年度の事業計画	5
II. 平成30年度取り組み報告	6
II-1. 成果概要	6
II-2. 全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果	14
II-3. 30年度の全学 SALC・学科 SALC での学修指導の時間割表	27
II-4. 30年度の開催事業：ファカルティデベロッパー錬成会	28
II-5. 30年度の授業シラバスと 学修到達度目標および SOJO ポートフォリオによる振り返り	35
II-6. 30年度の広報活動：本 AP 事業のパンフレット作成	39
II-7. 30年度の広報活動：大学ホームページへの本 AP 事業のページ作成	41
III. 平成30年度の学生の主体的な活動	
III-1. 「本学大学院生がファンドから出資受け(株) Ciamo 設立」	43
III-2. 「教職希望学生が学修サークルを立ち上げ現役採用試験合格者輩出」	46

I. 取り組み概要

I-1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等

本学は、戦後まもない昭和24年（1949年）、前理事長・学長 中山義崇が「戦後日本の疲弊を救う道は産業の振興と産業人の育成にある」と痛感し、私塾を創立したときに端を発する。以来、約65年間に渡って、「体・徳・智」という理念の下、科学技術を通じて地域社会に貢献する人材を育成してきた。平成12年（2000年）芸術学部の新設に併せて、校名を熊本工業大学から崇城大学へ変更し、さらに平成17年（2005年）薬学部を開設して、5学部体制となって現在に至っている。また、全学科から大学院進学への道が開かれている。

一方、平成5年（1993年）から始まった18歳人口の減少や、同年齢の若年人口の過半数が高等教育を受けるというユニバーサル化、日本社会のグローバル化の進行などの環境の変化の中で、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年）や、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（平成24年）などを受けて、現理事長・学長 中山峰男は「社会を真に救うには、たとえ一隅といえども、社会を変革し続ける能力を持つ人材の育成が急務である」と考え、その育成のため、(1)グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2)イノベーション・発明発見能力の錬磨、(3)起業家精神の陶冶、なる3大方針に基づいた、本学の教育改革を行っている。特に(1)については、平成23年「崇城大学教育刷新プログラム(SEIP)」をスタートさせた。それは、(A)体・徳・智の三育増進によるグローバル実践育成プログラム、(B)オーダーメイド型自立支援プログラム、(C)教育評価制度・組織改革プログラム、(D)教職員のFD/SD推進プログラムの4本柱からなる。また、本学では、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、平成22年度より15名に及ぶネイティブの教員によるSILC(Sojo International Learning Center)を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。同時にアクティブ・ラーニングの実施のために、SALC(Self-Access Learning Center)なる施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムをも構築してきた。全学学生数約3,500人の内、SALC利用者数は4年目で当初の10倍以上の約18,000人/年まで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。しかし、上記の三大方針(2)、(3)を実現するためには、卒業研究の質のさらなる向上をはかるとともに、全学年での学生の能力開発を積極的に行うことが必要であり、そのためには、多くの専門科目等におけるアクティブ・ラーニングの普及が課題となっている。

そこで、本事業においては、これまでSALCで培ってきた自律学修マインド育成のノウハウを、全学の専門科目等に波及浸透させることを目的として、本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学SALCならびに学科SALCを設置する。また、これらのSALCにおいて、個々の学生の自律学修を促し、各専門科目の講義と図書館利用を連携させる、ファカルティーデベロッパー（教員）及び学生ファシリテーターの育成を目指す。さらに学生証をICカード化し、図書館の入退館システムと連動させて、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかる。

I - 2. 事業の全体像

上述したように、本学では平成 25 年度より中長期計画として、(1) グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2) イノベーション・発明発見能力の錬磨、(3) 起業家精神の陶冶、なる 3 大方針に基づいて、教育改革を行っている。特に (1) については、すでに平成 22 年度より、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本の見直しを行い、15 名に及ぶネイティブの教員による SILC(Sojo International Learning Center) を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。また同時にアクティブ・ラーニングのための

SALC(Self-Access Learning Center) の施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムを構築してきた。右図は、SALC の年間延べ利用者数の変化を示している。SALC は、開設当初こそ、年間の述べ利用者数が約 1,500 人（全学学生数約 3,500 人）であったが、開設 4 年度目には、年間約 18,000 人にまで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。

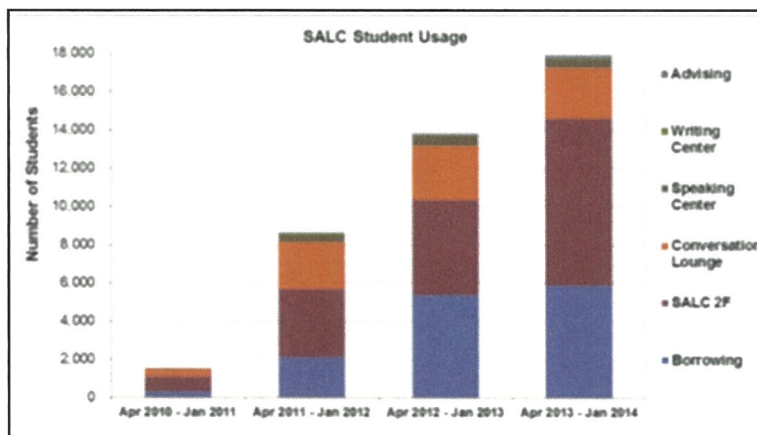


図 SALC 利用学生数 2010 年 4 月～ 2014 年 1 月

この育成のノウハウのポイントは、次の 3 つである。

- ① DVD や書籍などの英語教材と設備を備え、ICT(Moodle) を活用した講義外の自律学修ができる（宿題等の実施も含む）。
- ② ラーニングアドバイザー（専任教員）が 3 名、専従職員が 1 名常駐し、学習アドバイジングスキルを活用して、教材の選定や学習方法の助言（主体は学生）を行う。
- ③ SALC アクティビティを独自に作成し、学生が利用した分を 10% SILC の成績に反映する。

これらの学生の自律学修を促すノウハウを、全学の専門科目等に波及させることによって、本学における教育の多くがアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることが可能になり、学生の主体的学びの促進、学修時間の確保につながる事が期待される。そこで、本事業においては、上記、中長期計画の 3 大方針の (1) グローバル技術者育成をさらに加速し、(2)(3) の基礎となる学生の主体的学びのマインドを醸成するために、具体的に次の事業を行う。

(I) 全学的なアクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC および学科 SALC の整備とファカルティーデベロッパーの養成、および図書館との連携

本学では以前より、講義に関連した指定図書等を毎年選定して図書館に配置してきたが、学生の利用については十分とは言えなかった。そこで 26 年度より、講義の課題として、この指定図書等の図書館蔵書を利用したレポート提出を、全科目について義務付けるように全教員に依頼した（シラバスにおける具体的準備学修内容の記載）。前述の SALC においては、「SILC 講義の課題→ SALC でのラーニングアドバイザーによ

る自律学修のサポート→講義外の学修時間の確保→課題または課題以外のワークシートの提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環が回り、SALCの利用者も非常に増大している。そこで、この自律学修の好循環を全学の専門科目等に普及するため、全学 SALC および学科 SALC を整備し、自律学修をサポートするファカルティ・デベロッパー (FDer) を配置するとともに、大学院の全専攻 (10 学科に相当) から学生ファシリテーターを選抜し、主に専門科目の課題相談・学修を支援する。これによって「専門科目等の課題→全学 SALC・学科 SALC での FDer・学生ファシリテーターによる課題作成のサポート→図書館の指定図書等の利用→課題または課題以外のレポート提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環を作る。

全学 SALC は、当初は学内のほぼ中央に位置し 25 年度に竣工したアクティブコモンズ (多目的講義棟) の 2 階に整備したが、その後、上述した図書館との連携を深めるために、図書館 1 階に移設した。また、学科 SALC は、各学科棟に一つずつ整備する。本学では 23 年度から「崇城大学教育刷新プログラム (SEIP)」を実施し、その中で「教育重点教員制度」を構築した。これは教員の教育業績を評価し、昇格等に反映させる本学独自の制度である。そこで、これまでの 4 年間の SALC 活動で培った学生の自律学修を支援するノウハウを、二か月に一回行われる FDer 錬成会を通じてこの教育重点教員に伝承し、FDer を養成する。FDer の活動は、教育業績に反映するようにする。26 年度は、FDer を教養教育を担当する総合教育から 1 名、各学科から 5 名養成し、31 年度までに各学科で 1 名の FDer を養成する。また、各専門科目の課題の相談に対応するために、大学院の各専攻から毎年 1～3 名の学生ファシリテーターを選抜し、この全学 SALC および学科 SALC に日替わりで駐在させる。彼らは FDer とともに、各自の経験を活かして、課題を遂行させるために学生の図書館利用を促進させる。また、このために学生証を IC カード化し、図書館の入退館システムと連動させることで、学生の図書館利用時間を学科・学年・授業科目ごとに把握できるようにする。また、このデータを各科目担当教員にフィードバックし、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる。

(II) 学生の海外留学の促進のための SALC 機能の拡張と優れたリーダーシップを持つ学生の養成

本学では以前より、海外の大学との提携を拡大し、現在、世界 11 か国 22 大学との協定を結んでいる (25 年現在)。また、26 年度より、学則に留学規程を設けるとともに、全学的な奨学金制度を設け、学生の留学促進、協定校での学習成果の単位化を目指し、制度の整備をすすめている。

そこで、グローバル技術者育成を目指して、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の英語教育を行っている SILC での講義の目標として、海外留学を掲げ、これを促進するために、SILC/SALC に、異文化コミュニケーション講座を開設する。そして、これまでに留学経験のある学生を、留学ファシリテーターとして SILC/SALC に駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。

上記 (I) (II) における学生ファシリテーターや留学ファシリテーターは、下級生や他の学生にこれまでの経験を教えることで、自らが、学びの成果を再構築することができ、また、その過程でコミュニケーション能力を養うことが可能になる。これらのファシリテーター業務そのものが、真のアクティブ・ラーニングといえる。これらのファシリテーターの経験をつませることで、各学科・各専攻に、毎年複数の優れたリーダーシップを持つ学生の養成を行う。

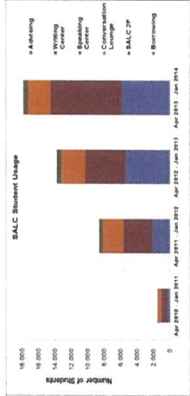
大学等名：崇城大学
テーマ：テーマI（アクティブ・ラーニング）

●取組概要：本学独自の英語教育施設(SILC: Sojo International Learning Center)に併設した自律学修センター(SALC: Self Access Learning Center)では、学生が主体的に学修し年間利用者数が4年間で12倍に拡大した。このSALCのノウハウを全学に普及させ学生の自律学修のマインドを醸成するとともに、専門科目のアクティブラーニング（AL）化を推進するために全学SALC/学科SALCを設置し、利用時間を可視化して単位の実質化を目指す。

～ALの基礎となる学生の自律学修の醸成とALの普及、単位の実質化を目指して～

これまでの取組

- 崇城大学英語教育施設SILC
- グローバル技術者育成のため、本学独自に2010年に設立
 - ネイティブ教員約15名で、講義はすべて英語で実施
 - 学生の英語自律学修を促す支援センターとしてSALCを設置
- SALCの特徴
- ①DVDや書籍などの英語教材を備え、ICT(Moodle)を活用した講義外の自律学修(アクティブラーニング)ができる。
 - ②ラーニングアドバイザーが3名が常駐し、教材の選定や学習方法の助言(主体は学生)を行う。
 - ③SALCアクティビティ(ワークショップなど)を独自に導入し、利用した分を一定の割合でSILCの成績に反映する。



⇒ SALC利用者が4年間で12倍に拡大。学生一人が年に5回は利用。

SALCのノウハウを普及させるためのFDer醸成会を開催。(FDerの活動は、本学独自の教育業績評価に反映)

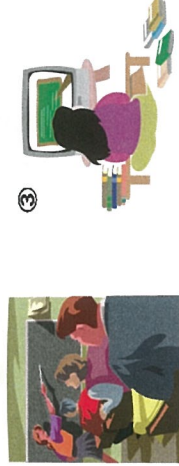
これからの取組

全学SALC/学科SALCの機能とアカルティアドバイザー(FDer)の役割

① FDer & 学生ファシリテーターによる講義課題等に対する学生の自律学修を促す助言の場(図書館の学科推薦図書等の利用等)



② FDerを中心に各専門科目にALを普及し、全学/学科SALCで実施



③ FDerを中心に自宅学修が可能な専門科目アクティビティを開発

⇒ 主体的に行動できる社会人の育成

【事業の成果】

	26年度 (実績値)	28年度 (実績値)	31年度 (目標値)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	92.9%	100%
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数の割合	35.6%	52.8%	60.0%
アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合	60%	61%	70%

- ・本事業を実施することで、22年度よりSILC/SALCを立ち上げ取組んできたアクティブ・ラーニングを全専門科目に普及させ、主体的に行動できる人材育成を加速する。
- ・本事業実施により、各学科に学生の主体的学びを支援する学科SALCが設置され、FDerの醸成によりFD活動が活性化される。

I-3. 30年度の事業計画

平成30年度の本事業は、引き続き29年度同様の目的のもとに行う。学科SALCの設置は平成28年度で完了しており、アクティブ・ラーニング(AL)の質を向上させるために、29年度と同様に、全学SALCおよび学科SALCでのアクティブ・ラーニングで使用する書籍等を計上するとともに、学科SALCアクティビティーを取りまとめる。また、専門科目へのSALCアクティビティーの普及を目指すためと、学習アドバイジングスキルを含んだ本学独自のノウハウの伝承のために、2か月に一回の頻度で、FDerおよび学生ファシリテーター(学生FC)からなるFDer錬成会を開催する。このFDer錬成会には、SILC/SALCの教員および外部講師を呼び、学生の自律学修マインド育成に関連するテーマの研修会も企画する。また、昨年度計画した連携大学である神田外語大学で行われる予定の「学習アドバイジングスキルトレーナー研修会」が、神田外大の都合で開催されなかったため、平成30年度にトレーナー(本学教員数名)養成のための費用を含めた謝金・旅費・会議費を計上する。この学内トレーナー育成によって、また、学習アドバイジングスキルの講習会を学内で複数回、全教員を対象に行うことが可能となり、FDer養成への寄与が大きい。このFDerの活動は、本人の教育業績としてカウントし、個人配布予算や教育重点教員としての昇格に反映させることで、インセンティブを持たせる。

また、このFDer錬成会は地域の高校教員にも開放できる開催日を設け、高校生に寄り添いながら、高校生のメタ認知能力を上げ、自らが明確な学習目標を設定し、目標達成に向けて行動ができ、さらには高校生が自分にあった学習方法を自ら選択するようにサポートする研修を共有する。この研修によって、高大接続7年間の中で、一人の学生の成長段階に応じたALの在り方・アクティブ・ラーナーを育成するための教育プロセスを独自に作成することを試みる。

また特に、平成30年度には、この事業取組を近隣の他大学にも広めるため、連携協定を締結している熊本保健科学大学、並びに協定締結を計画している熊本学園大学にも、このFDer錬成会を開放し、その成果を踏まえた講演会を共催で開催する。

学部・大学院の各学科・専攻から推薦された学生ファシリテーターには、その活動時間に応じて謝金を支払う。また、SILC/SALCでの留学支援は引き続き行い、国際交流センターとの共同で、異文化理解・留学促進のための異文化交流イベント・留学報告会を開催するとともに、留学ファシリテーターとして学内の留学相談窓口である国際交流センターに駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。この留学ファシリテーターにも、活動時間に応じて謝金を支払う。

本学の本事業は、アクティブ・ラーナーを育成するためにマインドの育成、いわば入口の取組といえるため、平成30年度は、他のAP採択校、特にテーマV(卒業時における質保証の取組の強化)の採択校への視察の回数を増やし、出口の質保証につなげるための参考とする。

上記に加えて、大学教育再生加速プログラム(AP)中間評価によって、特に「学生の主体的学びの達成度の指標の明確化」について改善を求められた。そこで、平成30年度よりSOJOポートフォリオを全学的に実施し、アクティブ・ラーニングを実施している授業シラバスに記載された学修到達度に対して、学生がどこまでできるようになったかを振り返る「学修到達度ポートフォリオ」を実施する。これによって、アクティブ・ラーニングによる授業理解度の効果を検証することができる。また、学生の主体性の成長を図るために、社会人基礎力テストの一種であるPROGテストを、全学科4年生に実施し、現在の本学の学生の主体性を客観的に評価する指標を得る。

II. 平成 30 年度取り組み報告

II-1. 成果概要 (平成 31 年 2 月時点)

30 年度の本事業では、英語教育施設 (SILC) の中に設置したアクティブ・ラーニングのための Self-Access Learning Center (SALC) の独自の自律学修プログラムのノウハウを、全学の教養科目・専門科目に普及することを目的として、以下の①～⑩を行った。まず本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC、及び各学科 SALC の設置を完了した。また、全学科から学生の自律学修を促すためのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターを選抜し養成した。これによって、アクティブ・ラーニングの講義数を増やすとともに、専門科目の講義で出される課題の自律学修をサポートし、講義と図書館の利用を連携させた。そのために、図書館に入退館システムを導入し、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかった。

これらの取り組みの成果として、全学 SALC の設置およびファカルティデベロッパーの養成によって、アクティブ・ラーニング形式の講義を受講した学生の数は、25 年度が 1182 人 (全学の 1～3 年 (薬学科は 1～5 年) の学生数 2453 人に対して 48.2%) であったが、30 年度は 2746 人 (全学の 1～3 年 (薬学科は 1～5 年) の学生数 2746 人に対して 100%) と増大した (31 年度の目標は 100%)。これによって、学生が主体的に学ぶ機会が増大したものと思われる。また、ファカルティデベロッパー錬成会によって、ファカルティデベロッパーの各教員は、対話を通じて学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」を身に付けつつある。これによって、授業の課題に対して、学生自らが主体的に学習する環境が整いつつある。また、学生の図書館での自律学修時間の把握が行えたので、今後、この時間の増大を目標にして、単位の実質化につなげる予定である。

また、本事業の取組は、平成 30 年度より崇城大学教育刷新プログラム (SEIP- II) に独自に発展し、全学の科目のシラバスに記載されている学修到達度目標に対して、学生がどの程度目標が達成されたかを振り返るポートフォリオを実施することとなった。このポートフォリオは、コンピューター上で学生の自宅からでも行えるようにし、最終的に、科目の評価点に結びつけることが全学的に決定した。また、シラバスの成績評価方法の記載欄には、中間試験・レポート・小テスト・成果発表など、これまでの定期試験のみによる評価から、多面的な成績の評価を行うように改訂した。これらの教育改革を、「学生の自律学修マインドを醸成する」本 AP 事業と連動させることによって、「学生が何を学んだかではなく、何ができるようになったか」を常に振り返り、学生の主体的な学びを育むことを目指した (参照資料「科目の学修到達度レポート」参照)。

① 4 月～ 今年度学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの養成

平成 30 年 5 月に学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの研修を行い、30 年度は、各学科から推薦された学生ファシリテーター 36 名、留学経験のある学生から選抜された留学ファシリテーター 8 名が養成された。

また、各学科 SALC の取組を学生ファシリテーター同士で情報共有するために、SALC ネットを立ち上げた。SALC ネットのミッションは以下のとおりである。

- ①全学 SALC・学科 SALC・留学アドバイジングルームの利用状況の情報共有を、ファカルティデベロッパーの教員とともに定期的に行う。

②上記の施設（総称して学科 SALC という）の利用を促進するための改善案や、教える喜びや関わる楽しさや悩みについて、定期的に意見交換を行う。

③学科 SALC に限らず、学内で主体的に活動している学生にも、SALC ネットへの加入を勧め、活動の内容を広く学内の教職員に知ってもらう。

④後輩の学生ファシリテーター・留学ファシリテーターを育てるための研修会へ協力する。

上記 SALC ネットの会を、ファカルティデベロッパー錬成会（29年度は5回開催）を兼ねた形で、30年度は7回開催し、学生と教員の視点の共有を図った。これらの取り組みの成果として、学生ファシリテーター（学生 FC；大学院生など）・留学ファシリテーター（留学経験学生など）が、後輩学生の主体性を育む学生への接し方や、各自のスタンスなどが身に付いたものと思われる。特に、後輩の学生が少しでも自ら話す環境（場）を作ることの重要性、話しやすい雰囲気を作るための方法などについて、各学科 SALC の取組を共有することで、さらに改善されたものと思われる。これらの学びは、彼らが優れたリーダーシップを有する学生に成長するために非常にためになったと思われる。

② 4月～3月 錬成会によるファカルティデベロッパーの技量養成

4月25日第22回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：情報学科山路先生、薬学科安楽先生、大栗先生） 神田外語学院で行われた「学習アドバイジングスキル研修会」の報告と情報共有を行った。参加者：25名

11月10日第23回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：着任3年までの45歳以下の新入教員および全教職員・学生 FC、テーマ「コミュニケーション力養成講座」）。本事業の目的である「学生の自律学修マインドの醸成」のためには、本学に新しく着任された新入教員に、本学の学生との向き合い方、コミュニケーションの取り方について研修を受けてもらう必要があると考え、FDer や学生 FC とともに、本講座を錬成会の一環として開催した。参加者：24名。

11月19日第24回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：着任3年までの45歳以下の新入教員および全教職員・学生、話題提供：本学ベストティーチング賞受賞者：木村先生（総合教育センター）、大栗先生（FDer・薬学科）、テーマ「ベストティーチャーから学ぶ」）。29年度のベストティーチング賞受賞者の教員から、授業改善のポイント・学生へ向き合うスタンス・主体的な学びの醸成などについて話題提供していただき、参加者全員でグループワークを行った。参加者：24名。

12月8日第25回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：着任3年までの45歳以下の新入教員および全教職員・学生、話題提供：本学ベストティーチング賞受賞者：梶川先生（宇宙航空システム工学科）、柿木先生（情報学科）、テーマ「ベストティーチャーから学ぶ」）。29年度のベストティーチング賞受賞者の教員から、授業改善のポイント・学生へ向き合うスタンス・主体的な学びの醸成などについて話題提供していただき、参加者全員でグループワークを行った。これらの錬成会を通じて、新人の教員の先生に、本学の AP の取組を知っていただくと同時に、アクティブ・ラーニングの授業の実例などについて知る機会になったものと思われる。参加者：14名。

3月18日第26回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員（特に薬学科教職員）・学生、話題提供：（株）リアセック代表取締役 松村直樹氏、テーマ「コンピテンシーとコンピテンシーに基づく薬学教育について」）。AP の中間評価に対応するため、学生の主体性の成長を客観的に評価する指針を得るために行った PROG テストにおいて、知識活用力を示すリテラシーがトップであった薬学科（全国平均スコ

ア 4.4 に対し 5.7)では、主体性を含むコンピテンシーが全国平均スコア 3.5 に対して 2.7 と学内最下位であった。この結果を踏まえ、薬学科では学生の主体性の醸成を含むコンピテンシー（経験をもとにした成果につながる行動特性）を向上させるための教育について学ぶ機運が高まり、今回の錬成会の開催につながった。この錬成会をもとに薬学 SALC の活用につなげたい。参加者：35 名。

3 月 18 日第 27 回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員・学生・熊本保健科学大学教職員、話題提供：SILC/SALC 宝来先生、オストマン先生、テーマ「学習アドバイジングスキルを活かしたアクティブ・ラーニングの実践とこれからの大学教育に向けての異文化理解」）。本事業の目的である「学習アドバイジングスキル」の学内外への普及を目指し、近隣大学である熊本保健科学大学との大学間連携協定に基づき、本錬成会を開催する。また、学生の海外留学の促進は、学生の自律学修マインドの醸成に効果的である。その際に異文化理解は非常に重要な観点であり、その理解を教職員で共有するために、本錬成会を開催する。参加者：65 名。

3 月 27 日第 28 回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員（特に空港キャンパス教職員）・学生、話題提供：日本航空株式会社整備本部業務部部长・株式会社 JAL エンジニアリング総務部部长 林 浩一氏、テーマ「社会が求める大学卒・整備士とは」）。本学には全国で初めて、航空整備士国家資格を取得できる学士教育課程が設置されている。これまで専門学校でのマニュアル重視の航空整備士養成課程から、汎用的基礎力を身に付け、様々な課題に対処できる学士力を有した航空整備士を育てるために必要な教育課程・教育手法が模索されている。この中には、学生の主体的な学びの醸成は不可欠であることから、本事業の取組として、宇宙航空システム工学科の FDer を中心に錬成会を企画した（今後実施予定）。

これらの取り組みの成果として、各学科やコースから選出されたファカルティデベロッパーやその他の教員（特に新任教員）が、7 回の錬成会で、アクティブ・ラーニングの手法の研修と、学生への向き合い方、学生と教員の視点の共有が図られた。また、神田外語学院での研修会（SILC/SALC の教員も受講してきた研修）を通して、対話を通して学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」に触れることができた。この「学習アドバイジングスキル」の研修は、29 年度までに合計 7 名の受講であったが、次年度（31 年度）は、「学習アドバイジングスキル」研修を学内で行えるように、トレーナー 1 名の養成を行う予定である。この学内「学習アドバイジングスキル」研修で、対話を通して学生の主体性を育むスキルを多くの本学教員へ身につけてもらうと同時に、高大接続事業の一環として、高校教員でアクティブ・ラーニングを担当される方々へも研修の門戸を広げたいと考えている。このスキルを身に付けたファカルティデベロッパーとの対話を通して、学生は、授業での課題に対して主体的に取り組むことが可能になるものと思われる。

③ 5 月～3 月 高大接続による、アクティブ・ラーナーを 7 年間で育成するための高校との連携

高大接続による高校 3 年間と大学 4 年間による自律学修マインドの醸成をはかるために、本学は理工系大学であることから、30 年度は県内のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）採択校の県立熊本北高校との連携を図った。具体的には、11 月 2 日熊本北高校教員 8 名と本学教職員 5 名（松下 AP 推進責任者を含む）で情報交換会を実施し、高校での SSH 経験者で本学に入学した学生の、その後の成長について情報共有を行った。その中には、大学院進学者も含まれ、高校と大学の実質的な接続による生徒・学生の教育の重要性と共有でした。

④ 4月～3月 1年生に導入している「キャリア基礎Ⅰ（必修）」の科目において、キャリア専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施（工学部・情報学部・生物生命学部）。

27年度から新しく1年生に導入された科目「キャリア基礎Ⅰ（必修）」において、キャリア専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施した（工学部・情報学部・生物生命学部）。これらの取組の成果として、アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合が、25年度53%であったのに対し、30年度は68%に増大した（31年度の目標は70%）。

⑤ 4月～3月 図書館入退館ゲートシステム及び学生証ICカードにより、学生の図書館利用時間・各科目シラバスに記載済みの参考書や図書館学科推薦図書（指定図書）等を利用した課題の提出状況・指定図書等の貸し出し状況等を解析し、このデータを学科・学年・授業科目ごとに把握し、各科目担当教員にフィードバックすることにより、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる（その際、図書館の倫理規定等に留意する）。

26年度の図書館利用者数は延べ105,418人であったのに対し、30年度の図書館利用者数は延べ123,416人（3/8現在）と増大している。また、学生の図書館利用の目的調査では、総利用者数の内、講義に関する資料の利用（自主学修）の割合が、26年度には21%だったのに対し、30年度は23%と微増した。

また、個々の利用者の利用時間は、0～30分が24.5%（29年度28.0%）、30～60分が14.5%（同15.2%）、60～90分が16.9%（同14.4%）、90～120分が23.5%（同23.5%）、120分以上が20.6%（同18.9%）であった。全体の図書館利用者数が伸びると同時に、滞在時間も60分以下が減少し、60分以上が増大している。講義に関する資料の利用が増大しているため、図書館を利用した講義外の学修時間が増えていることが示唆される。今後、これらのデータとアクティブ・ラーニング科目受講者との関連、全学SALC学科SALC利用者との関連について調査を行う予定である。その際には、本学の「個人情報保護規程」に留意する。

⑥ 4月～3月 全学SALC・学科SALCでのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターによる学生の自律学修支援

また、全学SALCは学生の自主学習の場としても利用され、26年度の利用者数延べ76人、27年度の利用者数延べ1,119人学生に対し、30年度の利用者数延べ1967人と自律学習の促進に寄与したが、学内での周知がまだ十分ではなく、今後さらに利用者を増やす必要がある。また、利用時間は、27年度が延べ560時間だったのに対し、30年度は3963時間と大きく増大した。

⑦ 国際交流センターでの留学ファシリテーターの活動と留学支援

30年度は、国際交流センターに留学ファシリテーターによる留学相談コーナーを設置し、延べ49名（29年度124名）の利用者があった。本学学生の海外留学は、26年度22名、27年度153名、28年度200名、29年度242名に対し、30年度は273名まで順調に増大している。この留学生数の増大は、留学経験者の留学ファシリテーターのアドバイスが活かされているものと思われる。また、留学した後の報告会にも多くの学生が参加しており、今後の益々の増加が期待される。

⑧ 2月～3月 学生の学修行動の把握分析と内部及び外部評価委員による評価を通して次年度の本事業に活かす

29年度は、30年3月27日に外部評価委員会（外部評価委員2名：田中岳（東京工業大学教育革新センター教授、山崎周一（熊本防錆工業（株）元会長））を開催した。その際の提言の一つに「中間評価を踏まえた学生の主体的学びの達成度の指標の明確化」があり、これを踏まえて、30年9月25日の後期オリエンテーション時に、主体性を含む社会人基礎力を評価する「PROGテスト」を全学科4年生に対して実施した。その結果、学科毎に社会人基礎力に大きな差があり、知識活用力を示すリテラシーがトップであった薬学科（全国平均スコア4.4に対し5.7）では、主体性を含むコンピテンシーが全国平均スコア3.5に対して2.7と学内最下位であったなどの特徴が現れた。来年度は、本事業の発展形として、大学独自のSOJOポートフォリオを含む教育改革（SEIP-II改革）を本格実施する。そのためにも、次年度の1年生の社会人基礎力を評価し、その指標をもとに、本事業のPDCAを回していく予定である。またさらに、図書館の利用状況データと、アクティブ・ラーニング科目受講者との関連、全学SALC学科SALC利用者との関連などを踏まえて、31年3月22日に30年度の評価委員会を行う。

これらの取り組みの成果として、内部及び外部評価委員会による本事業の検証評価により、本事業が客観的に評価され、進捗した点と不十分な点が明確になることが期待できる。事業のPDCAを回すことに、外部の視点を入れることで、学生にとって真に意味のある事業にできるようになるとともに、教育改革の上で最も重要な、教員の意識改革が行えるものと期待される

⑨ 2月～3月 次年度新規学生ファシリテーターの育成

平成31年3月29日に、次年度学生ファシリテーターの研修を兼ねた学生ファシリテーター・留学ファシリテーター研修会を行う予定である。これによって、教職員と学生との視点の共有、本大学での取り組みの共有が行え、来年度のファシリテーション業務に活かされるものと思われる。また、これらの取り組みの成果として、個々の学生ファシリテーターが、将来「優れたリーダーシップを持つ学生」として成長するためにプラスになるものと思われる。

⑩ 3月 他のAP採択校への訪問及び熊本近隣大学とのシンポジウムの共同開催

本学のAPの取組が、学士教育課程の根底（入口）にある「自律学修マインドの醸成」にあるに対し、タイプV（卒業時に質保証の取組強化）採択の千歳科学技術大学の取組は、学士教育課程の到達度を評価する「基盤力テスト」の開発に取り組んでいる。両校の取組は、言わばアクティブ・ラーニングの入口と出口に相当するものである。そこで、31年3月28日に、同校を訪問し、意見交換と情報共有をはかる予定である。また、上記の第27回FDer錬成会は、熊本近隣大学の熊本保健科学大学との連携協定に基づき共催で開催する。テーマは学習アドバイジングスキルの普及に関するもので、本事業の発信を兼ねている。

上記の成果を、数値目標との関連で下記にまとめ、関連する資料を添付した。

崇城大学 大学教育再生加速プログラム数値目標(KPI)のまとめ

	H25	H26	H27	H28	H29	H30(実績)	H31(目標値)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合(科目数で算定)	8.2%(導入科目数75/総科目数915)	12.2%(112/915)	18%(165/915)	20%(178/915)	21%(188/915)	23%(207/915)	25%(229/915)(15%)
今回の事業により導入するアクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目の割合	53%(40科目/75科目)	60%	59%(97/165)	61%(109/178)	63%(119/188)	68%(141/207)	70%(70%)
学生一人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	0.87科目(延べ2848人/在籍者数3266人)	1.5科目		3.7科目(延べ13140人/在籍者数3569人)	4.0科目(延べ14198人/在籍者数3586人)	4.5科目(延べ16164人/在籍者数3622人)	2.2科目(延べ7700人/3500人)(2.2科目)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2% 1182人/2453人 (1~3年(業は5年))	58.7% 1518人/2586人	79.1% 2155人/2725人	92.9% 2545人/2739人	95.3% 2602人/2729人	100% 2746人/2746人	100%(100%)
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	64人/総教員数247人	89人	103人	132人		167人	150人/総数250人(100人)
学生一人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	約2時間/週	2.3時間/週		5.0時間/週 (生命1・2年) (情報1・2年)	5.0時間/週 (生命1・2年) (情報1・2年)		約4時間/週 (4時間/週)
ファカルティデベロッパー数	0人	16名	16名	17人(総合教育3名+学科14名)	18人(総合教育4名+学科14名)	20人(総合教育4名+学科16名)	23人(11人)
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	0人	延べ39人	延べ158人	120人(実数)	167人(実数)		23人(20人)
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	約200人/3266人 [(約5人/1学科・1学年)×(10学科・4学年)]	289人		911人	899人	982人	900人(400人)
学生ファンリテーター養成数	0人	17人	19人	38人	41人	36人	
留学ファンリテーター養成数	0人	5人	6人	12人	12人	9人	
全学・学科SALC利用者数	0人	76人	1119人	1832人	1811人	1967人	
全学・学科SALCでの自律学修時間	0時間	延べ111時間	延べ560時間	延べ1643時間	延べ1698時間	延べ3963時間	
図書館利用者数	延べ104202人	延べ105418人	延べ121806人	延べ139830人	延べ130217人	延べ123416人	
図書館利用者の内、講義に関する資料の利用目的		約21%		約21%	約26%	約23%	
図書館利用時間 0~30分		24.4%	23.6%	33.8%	28.6%	24.5%	
図書館利用時間 30~60分		14.9%	14.8%	16.7%	15.4%	14.5%	
図書館利用時間 60~90分		17.9%	17.5%	12.7%	14.4%	16.9%	
図書館利用時間 90~120分		18.8%	22.3%	20.2%	23.0%	23.5%	
図書館利用時間 120分以上		24.0%	21.7%	18.6%	18.5%	20.6%	

2018年3月末 2019年3月8日(当初目標値)

学科名	合計[人]	在籍人数	利用率(回/人)
機械工学科	10795	330	33
ナノサイエンス学科	14192	225	63
建築学科	11203	338	33
宇宙航空システム工学科	10360	347	30
美術学科	1176	94	13
デザイン学科	1158	147	8
情報学科	21172	626	34
応用微生物工学科	13899	294	47
応用生命科学科	23222	361	64
薬学科	16239	858	19
合計	123416	3586	



崇城大学 アクティブ・ラーニングの基礎となる自律学修マインドを醸成 ～学生の自律学修マインド育成と単位の実質化～

【取組の概要】

本学では、グローバル技術者育成を目指し、2010年度より15名に及ぶネイティブ教員による英語教育施設(SILC)を立ち上げた。また同時にアクティブ・ラーニング(AL)のためのSelf-Access Learning Center(SALC)を設置して教員を配置し、独自の英語教育自律学修プログラムを構築してきた。全学学生数約3,500人の内、SALC利用者数は4年目で当初の10倍以上の約18,000人/年まで増大し、学生の自律学修マインド育成に貢献してきた。このSALCで培ったノウハウを全学に普及させるために、本学ALの拠点となる全学SALC及び学科SALCを設置する。また、これらのSALCにおいて、個々の学生の自律学修を促し各専門科目の講義と図書館利用を連携させるファカルティデベロッパー(FDer)と学生ファシリテーターの育成を目指す。図書館の入退館システムと連動させて、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかる。

【取組のポイント】

- アクティブ・ラーニングに対応できる学科SALC環境の整備
- 学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの養成
- 錬成会によるファカルティデベロッパーの技量養成
- ファカルティデベロッパーらの協力によるアクティブ・ラーニング授業の増大
- 全学SALC・学科SALCでのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターによる学生の自律学修支援



ファカルティデベロッパーによる学科SALCでの自律学修指導

【キーワード】

「アクティブ・ラーニング」、「自律学修」、「学習アドバイジングスキル」、「学生ファシリテーター」

【人材育成目標】

全学科にSALCを設置し、学生の自律学修を支援するとともに、アクティブ・ラーニングを行うことのできる環境を整備した。また、ファカルティデベロッパー(FDer)にSILC/SALCで培った「学習アドバイジングスキル」を錬成会で身に付けさせ、学生の主体性を引き出す学修支援を全学SALC/学科SALCにてできるようにした。引き続き、授業で出された課題に対し、積極的にFDerや学生ファシリテーターに相談し、全学SALC/学科SALCを利用して取り組み、FDerが中心に、ICTを活用して自宅で自律学修が可能なアクティビティを開発し、アクティブ・ラーニングを促す。アクティビティの成果は成績に反映させる。



全学SALCにおける学生ファシリテーターによる自律学修指導

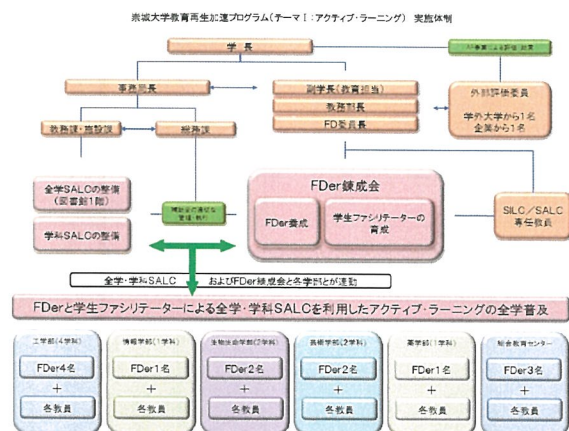
【教育上の課題】

本学では、アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合及びアクティブ・ラーニングを受講する学生の割合が本事業がスタートした2014年度時点より増加していることから、アクティブ・ラーニングの取組が浸透していることが伺える。しかしながら、同時に教育改革の一環として学部教育の見直しを行っており、その中で必修科目の数も増加していることから、必修科目中でのアクティブ・ラーニングの割合が計画通り伸びていないことが課題である。また、これらの取組によって、学生の主体性がどのように伸びているかを、客観的に評価しうる指標の構築が課題であると思われる。現在、すべての科目の学修到達度目標に対する学生の振り返り(ポートフォリオ)を実施しており、このポートフォリオの結果とアクティブ・ラーニング導入との相関を各教科にフィードバックすることによって、アクティブ・ラーニングのさらなる普及に努めたい。

【これまでの取組、実績・成果】

＜取組＞

英語教育の自律学修施設SALCの利用者が増大したノウハウを、他の教養科目・専門科目に普及させ、学生の自律学修マインドの醸成を図るために、各学科に学科SALCを設置した。また、そのノウハウの一つに学生との対話を通じて、学生の自律学修を支援する「学習アドバイジングスキル」があり、これをFDerを中心とした錬成会によって、専門学科の教員等に普及している。さらに、FDer錬成会には、学生ファシリテーター(後輩学生の自律学修相談にのる先輩学生)が参加し、アクティブ・ラーニングを実施する上での教員の視点と学生の視点が共有できるようになった。これらの取組の結果、アクティブ・ラーニングがより効果的かつ効率的に実施されている。さらに現在、もう一つのノウハウである学生の習熟度に応じて、学生が課題を自分で選択できる各科目のアクティビティの普及を図っている。また、2018年度より崇城大学教育刷新プログラムを独自に開始し、全科目のシラバスに記載されている学修到達度目標に対して、学生がどの程度目標が達成されたかを振り返るSOJOポートフォリオを実施する。この教育改革を「学生の自律学修マインドを醸成する」本AP事業と連動させることによって「学生が何を学んだかではなく、何ができるようになったか」を常に振り返り、学生の主体的な学びを育むことを目指している。



＜実績・成果＞

- 学生の主体的学びの意識改革に成功
- 学科SALCを利用した学生の自発的な学習サークルの発足
- 学科横断型の「教職サークル」の活動により、現役の教員採用試験合格者をAP事業採択後ほぼ毎年輩出
- 大学公認の起業部が発足し、学生が課外活動としてビジネスプランを練り、コンテストに応募、文部科学大臣賞を受賞
- 第6回全国英語プレゼンテーションコンテストで文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞
- 課外活動や研究活動、ボランティア等で主体的に活躍した学生を表彰する「学長賞」を設置

【今後の取組の計画】

＜取組の計画＞

2018年度から実施予定の崇城大学教育刷新プログラム（SEIP-II）の中で、個々の学生の学修状況を把握し、授業を振り返らせPDCAを回すための4つのSOJOポートフォリオを稼働させる。このポートフォリオの中に、全授業科目を対象とする「学修到達度ポートフォリオ」を設定し、シラバスの「到達度目標」の学生自身による自己評価レポート項目を設ける。この振り返りの中で一部ルーブリックを活用する。この取組によって、学生自身にどこまで主体的な学びができたかを振り返らせ、それを教員のFD活動にも利用する。

【本取組における成果と社会へのインパクト】

- 近隣の大学との連携協定を締結し、本取組で行っているFDer錬成会を共同開催
- 語学教育での主体的学びのノウハウである「学習アドバイジングスキル」を本取組によって、理系の各専門分野に適用可能なスキルに発展普及させることが可能になる。
- 理工系の学生の主体性を育てる観点で、大学と高等学校の視点を共有（特にSSH採択校との連携開始）
- 本取組の発展として、全学科全教科目で本学独自の学修到達度ポートフォリオ（振り返り）を実施し、アクティブ・ラーニングとの相乗効果で各科目の単位の実質化をはかると同時に、「学生の主体性を醸成する」学修PDCAサイクルを確立し、社会への普及をはかる。
- 英語教育の中で培われてきたSALCという概念と学修環境とそのノウハウを他の教養科目・専門科目へ普及するための取組
- 特別講演会の開催（学外に向けて発信）

【本取組の質を保証する仕組み】

＜報告書の発行および外部評価＞

年度末に「崇城大学大学教育再生加速プログラム取組報告書」を発行し、各年度の取組内容について振り返り、本取組の進捗状況を適切に評価するため、外部評価委員として大学及び企業から2名に参画していただき、事業評価を実施している。

～ALの基礎となる学生の自律学修の醸成とALの普及、単位の実質化を目指して～

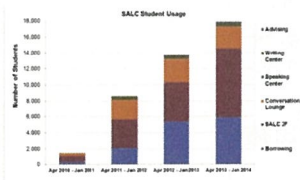
これまでの取組

崇城大学英語教育施設SILC

- ・グローバル技術者育成のため、本学独自に2010年に設立
- ・ネイティブ教員約15名で、講義はすべて英語で実施
- ・学生の英語自律学修を促す支援センターとしてSALCを設立

SALCの特徴

- ①DVDや書籍などの英語教材を備え、ICT(Moodle)を活用した講義外の自律学修(アクティブラーニング)ができる。
- ②ラーニングアドバイザーが3名が常駐し、教材の選定や学習方法の助言(主体は学生)を行う。
- ③SALCアクティビティ(ワークシートなど)を独自に導入し、利用した分を一定の割合でSILCの成績に反映する。



⇒ SALC利用者が4年間で12倍に拡大。学生一人が年に5回は利用。

SALCのノウハウを普及させるためのFDer錬成会を開催。(FDerの活動は、本学独自の教育業績評価に反映)

これからの取組

全学SALC/学科SALCの機能とファカルティデベロッパー(FDer)の役割
①FDer & 学生ファシリテーターによる講義課題等に対する学生の自律学修を促す助言の場(図書館の学科推薦図書等の利用等)



②FDerを中心に各専門科目にALを普及し、全学/学科SALCで実施



③FDerを中心に自宅学修が可能な専門科目アクティビティを開発



⇒ 主体的に行動できる社会人の育成

指標	2014年度 (実績)	2017年度 (実績)	2019年度 (目標)
AL(アクティブ・ラーニング)を導入した授業科目数の割合	12.2%	21.0%	25.0%
ALを受講する学生の割合	58.7%	95.3%	100%
学生1人当たりAL科目受講数	1.5科目	4.0科目	2.2科目
ALを行う専任教員数	35.6%	63.2%	60.0%
学生1人当たりのAL科目に関する授業外学修時間(1週間あたり)	2.3時間	5.0時間	4.0時間
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	16人	167人 (実数)	23人
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	289人	899人	900人

Ⅱ-2. 全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
総合教育	①基礎物理学・学科により必修もしくは選択・上野賢仁 天本徳浩・1・121・0 ②物理学・学科により必修もしくは選択・上野賢仁 天本徳浩・1・155・0 ③物理学実験・学科により必修もしくは選択・町田光男 上野賢仁 天本徳浩 池田達裕・2・185・0	④ベンチャー起業論I・選択・中島厚秀 田口雄太・1年・520・20 ⑤キャリア基礎I・必修・辻田祐純 藤本元啓 石倉恵介 今井亮佑 岩本晃代 王雪 木村勝美 阪本達也 水月晃 鈴木俊洋 瀬口春一 園部博範 田口雄太 竹内明里 富田健之 中島厚秀 永松俊雄 増村雅尚 宮崎昭次 山本康詞・1年・630・120 ⑥キャリア基礎II・必修・辻田祐純 藤本元啓 石倉恵介 今井亮佑 岩本晃代 王雪 木村勝美 阪本達也 水月晃 鈴木俊洋 瀬口春一 園部博範 田口雄太 竹内明里 富田健之 永松俊雄 増村雅尚 宮崎昭次 山本康詞・2年・630・120 ⑦キャリア基礎III・必修・辻田祐純 藤本元啓・3年・530・30 ⑧キャリア実践I(3機)・必修・藤本元啓・3年・88・0 ⑨キャリア実践II(3機)・必修・辻田祐純・3年・76・0 ⑩キャリアデザインII(3美デ)・必修・辻田祐純・3年・48・0 ⑪英語1/⑫英語2・SILC教員・1年・全学年800人・0 ⑬英語3/⑭英語4・SILC教員・2年・全学年800人・0	⑮ベンチャー起業論II・選択・中島厚秀 田口雄太・1年・320人・20人 ⑯イノベーション論I・選択・中島厚秀 王雪・2年・320人・10人 ⑰イノベーション論II・選択・中島厚秀 王雪・2年・170人・10人

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
機械工学科	①機械製図基礎・必修・里永、片山・1年・85・2～3(各班1名程度) ②機械製図応用・必修・片山、里永、竹田、河瀬、生田・2年・85・2～3(各班1名程度) ③機械設計製図・選択必修・森、渡邊、竹田・3年・41名・不明 ④生産システム・選択・里永・3年・47名・10名(各班1名程度) ⑤機械工学実験・演習・必修・森、小野、片山、齊藤、渡邊、平、河瀬、中牟田・3年・80名・6～12名(各班1～2名程度)	⑥ロボット製作・選択・平、森、内田、竹田、山澤、前田、生田・1年・77名・20名(各班1名程度) ⑦フレッシュマンセミナー・選択・齊藤、片山、内田、北田、渡邊、平、竹田、中牟田・1年・77名・(各班5～6名) ⑧機械製作実習・選択・内田、森、山澤、前田、河瀬、生田・3年・34名・11名 ⑨機械工学実験・演習【同左⑤】・必修・森、小野、片山、齊藤、渡邊、平、河瀬、中牟田・3年・80名・6～12名(各班1～2名程度) ⑩機械図面と加工・選択必修・里永、前田、河瀬、山澤、(生田)・3年・40名・10名(各班1名程度) ⑪コンピュータ援用設計・選択必修・劉、渡邊、竹田・3年・40名・10名(各班1名程度)	⑫機械製作実習【同左⑧】・選択・内田、森、山澤、前田、河瀬、生田・3年・34名・9名 ⑬学生フォーミュラ・課外活動・生田、内田・1～4年・10～20名・1～3名程度 ⑭ロボット研究会・課外活動・平、森、河瀬・機械、情報1～4年・21名・3名程度

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
ナノサイエンス学科	①分析化学実験(必修・西田正志・池永和敏・1年・60名・10名) ②環境生物科学実験(必修・迫口明浩・田丸俊一・櫻木美菜・1年・60名・10名) ③環境物質科学実験(必修・池永和敏・西田正志・1年・60名・10名) ④素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・60名・10名) ⑤素材科学実験II(必修・八田泰三・水城圭司・2年・60名・10名) ⑥素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・60名・10名) ⑦生化学実験(必修・田丸俊一・3年・60名・10名) ⑧プロセス工学実験(必修・草壁克己・迫口明浩・櫻木美菜・3年・60名・10名) ⑨化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明1年・60名・10名) ⑨機能性高分子科学(選択・黒岩敬太・3年生・50名・3名) ⑩材料組織学(選択・友重竜一・2年生・30名・2名) ⑪無機材料科学(選択・友重竜一・3年生・20名・1名) ⑫コンピュータ科学(選択・迫口明浩・2年生・49名・10名)	⑬化学II(必修・友重竜一担当部分)・1年・60名・10名) ⑭化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明・1年・60名・10名) ⑮素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・60名・10名) ⑯素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・60名・10名) ⑰環境物質科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ⑱産業と生活環境科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ⑲生化学実験(必修・田丸俊一・3年・60名・10名) ⑳学外実習(必修・櫻木・黒岩・3年・50名・10名) ㉑ナノサイエンス入門(必修・全員・1年・60名・10名) ㉒技術者の基礎知識(必修・土橋和之・3年・60名・10名) ㉓特別活動IV(選択・草壁・3年・50名・10名) ㉔ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・60名・10名) ㉕材料組織学(選択・友重竜一・2年生・30名・2名) ㉖無機材料科学(選択・友重竜一・3年生・20名・1名)	㉗ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・60名・10名) ㉘化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明・1年・60名・10名) ㉙専門英語I(選択・草壁克己・3年・60名・10名) ㉚学外実習(必修・櫻木・黒岩・3年・50名・10名) ㉛特別活動IV(選択・草壁克己・3年・50名・10名)

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
建築学科	<p>①【科目名】アーキワークⅠ 【必修選択】必修 【教員名】村田, 中藪, 内丸, 東, 島津 【学年】1年 【受講人数】95名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>②【科目名】アーキワークⅡ 【必修選択】必修 【教員名】村田, 西郷, 本保, 東, 島津 【学年】1年 【受講人数】107名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>③【科目名】アーキワークⅢ 【必修選択】必修 【教員名】秋元, 村田, 島津, 松茂良, 原田 【学年】2年 【受講人数】84名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>④【科目名】アーキワークⅣ 【必修選択】必修 【教員名】内丸, 村上, 島津, 松茂良 【学年】2年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑦【科目名】建築設計Ⅰ 【必修選択】必修 【教員名】古賀, 秋元, 本保 【学年】1年 【受講人数】95名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】1名</p> <p>⑧【科目名】建築設計Ⅱ 【必修選択】必修 【教員名】秋元, 西郷, 本保 【学年】1年 【受講人数】96名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑨【科目名】建築設計Ⅲ 【必修選択】必修 【教員名】西郷, 内丸, 本保, 村上, 村田, 東, 島津 【学年】2年 【受講人数】84名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑩【科目名】建築設計Ⅳ 【必修選択】必修 【教員名】本保, 中藪, 西山 【学年】2年 【受講人数】78名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑪【科目名】建築意匠設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】中藪 【学年】3年 【受講人数】26名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】13名</p> <p>⑫【科目名】建築設備設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】村田, 木村 【学年】3年 【受講人数】26名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑬【科目名】地域計画設計 【必修選択】選択(建築計画コース必修) 【教員名】内丸 【学年】3年 【受講人数】19名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】15名</p>

<p>建築学科</p>	<p>⑤【科目名】建築史Ⅰ 【必修選択】必修 【教員名】内丸, 原田 【学年】2年 【受講人数】81名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑥【科目名】建築史Ⅱ 【必修選択】必修 【教員名】内丸 【学年】2年 【受講人数】83名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑬【科目名】建築構造設計 【必修選択】選択(建築構造コース必修) 【教員名】東, 川島 【学年】3年 【受講人数】32名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑭【科目名】デザイン実習Ⅰ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】72名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】2名</p> <p>⑮【科目名】デザイン実習Ⅱ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】31名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】2名</p> <p>⑯【科目名】デザイン実習Ⅲ 【必修選択】選択 【教員名】中菌 【学年】2年 【受講人数】40名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】20名</p> <p>⑰【科目名】建築構造実験 【必修選択】必修 【教員名】島津, 松茂良, 林 【学年】2年 【受講人数】16名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p>	
-------------	---	--	--

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。 講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。 物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
宇宙航空システム工学科	①専門英語Ⅰ(整備学)/選択 /麻田/2年/28名/0名 ②専門英語Ⅱ(整備学)/選択 /麻田/2年/28名/0名 ③航空法規Ⅰ(操縦)/選択/ 久次米/1年/20名/0名 ④航空機システム基礎(操縦) /選択/久次米/1年/20名/ 0名 ⑤航空宇宙工学・実験Ⅰ(シス): 選択、金澤ほか、2年、33人 ⑥航空宇宙工学・実験Ⅱ(シス): 選択、白石ほか、3年、47人	⑦航空宇宙工学・演習Ⅰ: 選択、小林健児、千馬浩充・1年・59人・0 ⑧航空宇宙工学・演習Ⅱ: 選択、小林健児、千馬浩充・2年・35人・0 ⑨航空宇宙工学・演習Ⅲ: 選択、小林健児、千馬浩充・3年・16人・0 ⑩宇宙推進工学: 選択、小林健児・3年・40人・0 ⑪航空宇宙機設計論: 選択、岡本博之、3年・30人 ⑫航空電子装備品(2整)/選択/麻田/2年/27名/0名 ⑬航空機性能運動実習Ⅱ(整備学): 選択 橋本(昇)宮元/2年/24名/0名	⑭誘導制御Ⅰ 選択 橋本毅・2年 25名/0

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
情報学科	①ものづくり教室／選択／青木、柿木、亜原理／1年／70名／5名／ ②電子情報基礎実験／選択／杉浦、宗像、西嶋／2年／42名／12名／ ③情報通信実験／選択／吉岡、山路、池田／3年／40名／6名／ ④情報処理基礎A／選択／齋藤／1年／88名／3名／ ⑤情報処理基礎B／選択／齋藤／1年／82名／3名／ ⑥電気回路入門／必修／西嶋／1年／168人／10名 ⑦電気回路 I A／選択／西嶋／1年／56人／2名 ⑧電気回路 I B／選択／西嶋／1年／62人／2名	⑨電磁気学Ⅱ／選択／宗像／2年／38名／10名／ ⑩メディアコンテンツ制作入門／選択／星合、植村、非常勤講師3名／2年／61名／6名／ ⑪ヒューマンインタフェース／選択／木村／3年／38名／6名／ ⑫電磁気学Ⅰ／選択／青木／1年／38名／7名／	⑬ソフトウェアエンジニアリング入門／選択／星合／2年／94名／10名／ ⑭メディアコンテンツ制作演習／選択／星合、植村、非常勤講師3名／2年／55名／6名／ ⑮制御工学／選択／亜原理・有／3年／33名／6名／

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ること で、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
応用微生物工学科	①「応用微生物学実験」(必修) (原島、岡、浴野)(1-2年)(78名)(10名) ②「生物化学実験」(必修)(安藤、松元)(2年)(80名)(10名) ③「食品生物科学実験」(必修) (寺本、三枝)(3年)(80名)(10名) ④「生物資源環境工学実験」(必修)、(松岡、長濱、中山)(3年)(80名)(10名) ⑤「微生物遺伝学実験」(必修) (田口、笹野)(2年)(80名)(10名) ⑥「分析化学実験」(必修)(山田、西園)(1年)(80名)(10名) ⑦「化学I」(必修)(中山)(1年)(80名)(10名) ⑧「バイオテクノロジー総論I」「バイオテクノロジー総論II」(必修選択) (浴野)(3年)(80名)(10名)	⑨「環境保全工学」(選択) (長濱)(2年)(68名)(10名) ⑩「食品分析学」(選択)(山田)(3年)(40名)(0名) ⑪「食品生物科学実験」(必修) (寺本、三枝)(3年)(80名)(10名) ⑫「化学工学」(選択)(長濱)(2年)(27名)(10名)	

応用生命科学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
応用生命科学科	<p>①科目:生化学Ⅱ(前期) 必修選択:必修科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:106名 授業内容:半反転授業</p> <p>②科目:分子生物学(前期) 必修選択:必修科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:106名 授業内容:半反転授業</p> <p>③科目:遺伝子科学(後期) 必修選択:選択科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:88名 授業内容:半反転授業</p> <p>④生命情報科学実験I ・必修科目・教員名:進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年:2年生・受講人数:8.9人の12グループ・リーダーシップ:12名(グループ1名)</p> <p>⑤生命情報科学実験II ・必修科目・教員名進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年:3年生・受講人数:8人の12グループ・リーダーシップ:12名(グループ1名)</p> <p>⑥医用生体工学実験 ・必修科目・教員名:松本、松下、後藤、市原、古水・学年:3年生・受講人数:6.7人の16グループ・リーダーシップ:32名(グループ2名)</p> <p>⑦生命環境科学実験 ・必修科目・教員名:千々岩、西山孝、平大輔・学年:3年生・受講人数:8.9人グループ×12 ・リーダーシップ:0名</p> <p>⑧細胞工学実験 必修科目・教員名:宮坂均、山本進二郎、林修平・学年:3年生・受講人数:3、4名のグループ×24・リーダーシップ:0名</p> <p>⑨基礎生命科学Ⅰ(有機化学) ・必修科目 ・教員名:古水 ・学年:1年、授業人数:70名 ・リーダー0名</p>	<p>⑩科目:生理活性物質(後期) 必修選択の区分:選択科目 教員名:齋田哲也 学年:3年 受講人数:18名 優れたリーダー:2 授業内容:PBL</p> <p>⑪科目:自然共生人類学 必修選択の区分:選択科目 教員名:松下、古水 学年:1年 受講人数:90名 リーダーシップ:21名</p> <p>⑫科目:基礎生命科学Ⅴ(薬学基礎)(前期) 必修選択の区分:必修科目 教員名:齋田哲也 学年:3年 受講人数:85名</p> <p>⑬科目:細胞機能学(前期) 必修選択:選択 教員名:山本進二郎 学年:3年 受講者数:56名 授業内容:PBL リーダーシップ:6名</p>	

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の見方、考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
美術学科		<p>美術学科の実習科目は学生同士というのではなく学生自身が出された課題を学生個人で主体的に制作していく。理論系の科目も基本学生個人主体によるもの。</p> <p>H30年度実施</p> <p>1年(選択必修)</p> <p>①-② 日本画実習 I A・B 中村・佐藤・稲葉(非):各4人</p> <p>③-④ 洋画実習 I A・B 有田・熊谷・下城(非) 各10人</p> <p>⑤-⑥ 彫刻実習 I A・B 楠元: 2人、</p> <p>⑦-⑧ 美術史基礎演習 I - II 関根・永田: 2人</p> <p>2年</p> <p>⑨-⑩ 日本画実習 II A・B 中村・佐藤: 各11人</p> <p>⑪-⑫ 洋画実習 II A・B 有田・熊谷・下城(非) : 各13人</p> <p>⑬-⑭ 彫刻実習 II A・B 楠元: 各2人、</p> <p>⑮-⑯ 芸術学演習 I - II 関根・永田: 各6人、</p> <p>⑰-⑱ デザイン表現演習 I - II 三枝・永田: 各3人、</p> <p>⑲-⑳ 西洋美術史特論 I - II 関根各2人、</p> <p>㉑-㉒ 日本・東洋美術史特論 I 永田: 4人</p> <p>㉓ 視覚造形実習 I - II 永田・三枝・飯田・甲野・野島(泉)・野島(マ) 4人</p> <p>3年</p> <p>㉔-㉕ 日本画実習 III-IV A・B 中村・佐藤: 各4人</p> <p>㉖-㉗ 洋画実習 III-IV A・B 有田・熊谷: 12人</p> <p>㉘-㉙ 彫刻実習 III-IV A・B 勝野: 各2人、</p> <p>㉚-㉛ 西洋美術史特論 III-IV 関根: 各2人</p> <p>㉜ 特別演習(日本画) 稲葉(非): 4人</p> <p>㉝ 特別演習(洋画) 有田・堀井(非) : 8人</p> <p>㉞ 特別演習(彫刻) 楠元: 2人</p> <p>㉟ 特別演習(芸文) 関根: 2人</p> <p>視覚造形実習 III-IV 永田、野島(マ)、野島(泉): 2人</p>	<p>美術学科展は学生が主導的に実施し、協働作業で展示を行い、展覧会を実現する上ではこのタイプに属するものであろう。(毎年、前期中に開催)</p> <p>H30年度実施</p> <p>1~4年(全学年美術学科全員)・各コースの学科展(5~6月開催)、学科行事</p> <p>3年必修科目</p> <p>㉞ 学外演習(視覚芸術) 2人</p> <p>【* プラザ図書館における「よしみち展」2018・11・18-11・25】</p> <p>3年選択必修科目(芸術文化コース)</p> <p>㉟ ワークショップ演習(通年) 永田: 4人</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
デザイン学科		1年 ①■コミュニケーションデザイン論演習 森野・甲野 40人 選択 ②■コンピュータ基礎実習 坂井 40人 選択 ③■造形基礎実習 本間・飯田 40人 必修 ④■デジタルデザイン基礎演習 甲野 40人 選択 ⑤■表現基礎実習 森野・甲野 40人 必修 ⑥■映像表現論演習 坂井 40人 コース選必	すべて必修 ⑳■デザイン基礎実習 I 1年40人、 ㉑■デザイン基礎実習 II 1年40人、 ㉒■プロジェクト実習 I 2年生30人、 ㉓■プロジェクト実習 II 2年生30人、 ㉔■デザイン総合演習 I 3年生35人 ㉕■デザイン総合演習 II 3年生35人 デザイン学科教員全員8人 各プロジェクトでリーダー、副リーダーでプロジェクトを進めていく。8プロジェクトでリーダー育成8人、副リーダー育成8人
		2年 ⑦■デザイン発想論演習 本間 35人 選択 ⑧■生活環境デザイン実習 I 本間・飯田 6人 コース選必 ⑨■グラフィックデザイン実習 森野・甲野・岩上 20人 コース選必 ⑩■生活環境デザイン実習 II 原田・本間 6人 コース選必 ⑪■メディアデザイン実習 甲野 20人 コース選必 ⑫■情報デザイン論演習 森野 20人 選択 ⑬■造形材料論演習 飯田 6人 コース選必 ⑭■色彩論演習 甲野 20人 選択 ⑮■デザインビジネス論演習 飯田・岩上 20人 コース選必 ⑯■マンガ表現演習 I 岩田 20人 コース選必 ⑰■マンガ表現演習 II 岩田 20人 コース選必 ⑱■脚本ストーリー演習 20人 コース選必	

デザイン学科		<p>3年</p> <p>⑱■空間デザイン実習 原田 8人 選択</p> <p>⑳■コンテンツ制作実習 坂井 20人 選択</p> <p>㉑■総合造形実習 三枝 20人 選択</p> <p>㉒■プロダクトデザイン実習 I 本間・飯田 4人 選択</p> <p>㉓■広告デザイン実習 森野・甲野・岩上 20人 選択</p> <p>㉔■アートクリエイション実習 三枝 10人 選択</p> <p>㉕■環境デザイン実習 原田 4人 選択</p> <p>㉖■クロスメディア総合実習 森野 10人 選択</p> <p>㉗■イラストレーション実習 小川 20人 選択</p> <p>㉘■プロダクトデザイン実習 II 飯田・本間 4人 選択</p> <p>㉙■マンガ表現演習 III 岩田 20人 選択</p> <p>㉚■マンガ表現演習 IV 岩田 20人 選択</p> <p>㉛■デザインストラテジー 森野 20人 選択</p>	
--------	--	--	--

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成30年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
薬学科	<p>①【科目名】 実務実習事前学習(I) 【必修選択】 必修 【教員】 宮村重幸 【学年】 4年 【受講人数】 122名 【リーダー】 0</p> <p>②【科目名】 実務実習演習(4月～5月前半) 【必修選択】 必修 【教員】 宮村重幸・石黒 貴子 【学年】 5年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>③【科目名】 物理化学Ⅱ 【必修選択】 必修 【教員】 宮本 秀一・下野和実 【学年】 2年 【受講人数】 140名 【リーダー】 0</p> <p>④【科目名】 物理化学Ⅲ 【必修選択】 必修 【教員】 宮本 秀一・下野和実 【学年】 2年 【受講人数】 140名 【リーダー】 0</p>	<p>⑤【科目名】 生命倫理学 【必修選択】 必修 【教員】 中嶋 弥穂子・松倉 誠 【学年】 1年 【受講人数】 153名 【リーダー】 0</p> <p>⑥【科目名】 医薬倫理学 【必修選択】 必修 【教員】 松倉 誠 【学年】 4年 【受講人数】 122名 【リーダー】 8名(16グループ)</p> <p>⑦【科目名】 実務実習事前学習(I) 【必修選択】 必修 【教員】 宮村重幸 【学年】 4年 【受講人数】 122名 【リーダー】 0</p> <p>⑧【科目名】 実務実習事前学習(Ⅱ) 【必修選択】 必修 【教員】 宮村重幸・瀬尾 量・松倉 誠・中嶋 弥穂子・山崎 啓之・藤井 績・石黒 貴子・堀尾 福子 【学年】 4年 【受講人数】 122名 【リーダー】 0</p> <p>⑨【科目名】 実務実習演習(4月～5月前半) 【必修選択】 必修 【教員】 宮村重幸・石黒 貴子 【学年】 5年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>⑩【科目名】 分析・物理化学実習 【必修選択】 必修 【教員】 竹下啓蔵・岡崎祥子・宮本秀一・下野和実 【学年】 3年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p>	

Ⅱ - 3. 30年度の全学SALC・学科SALCでの学修指導の時間割表

全学SALC・学科SALCでの学修支援の時間割表（担当の先生および実施場所） 平成30年度前期
 ※下級生や他の学生からの学びに関する相談、質問に対応いたします。ぜひ、ご活用ください。 FC：ファシリテーター

	月	火	水	木	金
1限					
2限		情報SALC【F603】 ：学生FC			情報SALC【F603】 ：学生FC
昼休み	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC デザインSALC【D406】 ：飯田先生	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：学生FC 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC
3限					
4限	情報SALC【F603】 ：木村先生・学生FC 数学SALC【図書館1階】 ：学生FC		ナノSALC【N棟4階大学院講義室】 ：迫口先生（5/30まで）・学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC	応徴SALC【H-4階図書室】 ：岡先生・学生FC
5限	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】 ：学生FC 建築SALC【K101】 生命SALC【G315】 ：齋田先生・学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】 ：学生FC 物理SALC【図書館1階】 ：天本先生・学生FC 薬学SALC【ANEX1階】 ：学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生 応徴SALC【H-4階図書室】 ：学生FC 薬学SALC【ANEX1階】 ：安楽 生命SALC【G315】 ：進先生・学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生 薬学SALC【ANEX1階】 ：学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】 ：学生FC 物理SALC【図書館1階】 ：上野先生・学生FC 数学SALC【図書館1階】（5時限後半～6時限前半） ：大嶋先生・学生FC ナノSALC【N棟4階大学院講義室】 ：迫口先生・学生FC 生命SALC【G315】 ：学生FC

全学SALC・学科SALCでの学修支援の時間割表（担当の先生および実施場所） 平成30年度後期
 ※下級生や他の学生からの学びに関する相談、質問に対応いたします。ぜひ、ご活用ください。 FC：ファシリテーター

	月	火	水	木	金
1限				情報SALC【F603】 ：学生FC	
2限		情報SALC【F603】 ：学生FC 機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC	情報SALC【F603】 ：木村先生		
昼休み	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC デザインSALC【D406】 ：飯田先生	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：学生FC 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC	空港SALC【206教室】 ：麻田先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 ：留学FC
3限					応徴SALC【H-4階図書室】
4限	物理SALC【図書館1階】 ：天本先生・学生FC	数学SALC【図書館1階】 ：大嶋先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】	ナノSALC【N棟4階大学院講義室】 ：迫口先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】	数学SALC【図書館1階】 ：学生FC	情報SALC【F603】 ：学生FC
5限	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 ：学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】 薬学SALC【ANEX1階】 ：学生FC	機械SALC【I630】 ：吉良先生 薬学SALC【ANEX1階】 ：安楽 生命SALC【G315】 ：進先生・学生FC 建築SALC【K101】	機械SALC【I630】 ：吉良先生 薬学SALC【ANEX1階】 ：学生FC 応徴SALC【H-4階図書室】 物理SALC【図書館1階】 ：上野先生・学生FC 建築SALC【K101】	機械SALC【I630】 ：吉良先生・学生FC 美術SALC【A104】 ：佐藤先生・学生FC ナノSALC【N棟4階大学院講義室】 ：迫口先生・学生FC 生命SALC【G315】 ：齋田先生・学生FC

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



ファカルティ・ディベロッパー

第22回 F D e r 錬成会

SALCネットの会

テーマ：「学習アドバイジングスキル講習会の報告」

日時：2018 年 4 月 25 日（水）16 時 40 分～18 時 10 分

場所：図書館1階全学SALC 対象：教職員、FC

ファシリテーター：生命 松下先生

講師：薬学 安楽先生、薬学 大栗先生、情報 山路先生

今回の錬成会は、年度末に神田外語学院で「学習アドバイジングスキル」の講習会に参加いただいた3名の先生方（安楽先生（薬）大栗先生（薬）山路先生（情））による報告となります。皆様、奮ってご参加ください。



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学大学教育再生加速プログラム（AP）事業

第23回 FDer 錬成会

2018 崇城大学新人教員 F D 研修会事業

第1回大学人教育力養成講座

テーマ：「コミュニケーション力養成講座」

日時：2018年11月10日（土）13時00分～18時30分

場所：SoLA2 階アクティブ・ラーニング教室 対象：教員・学生

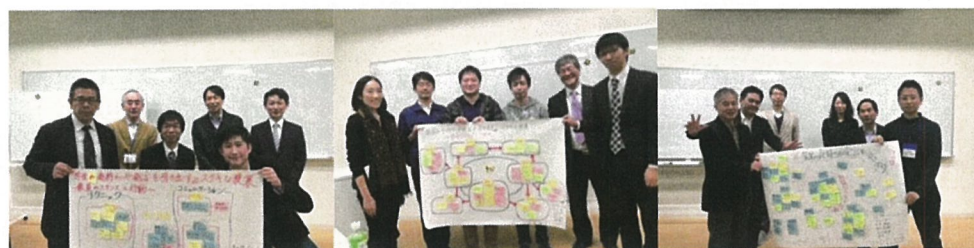
講師：本田先生（株LV）

本学では、昨年度から、全学の教員、特に若手の先生を対象として、「大学人教育力養成講座」を開講しています。大学においては、教育と研究は車の両輪に例えられますが、近年、ステークホルダーから特に教育力が大学に求められております。しかし、アカデミアを目指す先生方は、学位の取得を通じて研究力は磨かれてきますが、教育力については、そのような機会がないままに、教壇に立っているのが現状です。若手の先生方や、教育経験の少ない企業から来られた先生方に、このような大学（特に本学）での教育力を身に着けていただこうと企画した講座です。目的、狙いは次の3つです。

- ①学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- ②学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」について体験を通して学ぶ。
- ③ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

第1回目の講座では、「エゴグラム」という性格分析の手法を学べます。人間の性格を5つの心に分けて分析・理解するもので、これを知ることによって、コミュニケーション力の養成につながります。

年に一度の参加をお願いしているFD講演会の一環となります。皆様、奮ってご参加ください。（学生ファシリテーター・教職サークルにも参加を呼び掛けています）



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学大学教育再生加速プログラム (AP) 事業

第 24 回 FDer 錬成会

2018 崇城大学新人教員 F D 研修会事業

第 2 回大学人教育力養成講座

テーマ:「ベストティーチャーから学ぶ」

日時:2018 年 11 月 19 日(月)13 時 00 分~18 時 30 分

(井芹祭のあと片付けで休講です)

場所:SoLA2 階アクティブ・ラーニング教室 対象:教員・学生

講師:木村先生(総合)、大栗先生(薬)

ファシリテーター:本田先生(株LV)、迫口先生(FD 委員)

本学では、昨年度から、全学の教員、特に若手の先生を対象として、「大学人教育力養成講座」を開講しています。大学においては、教育と研究は車の両輪に例えられますが、近年、ステークホルダーから特に教育力が大学に求められています。しかし、アカデミアを目指す先生方は、学位の取得を通じて研究力は磨かれてきますが、教育力については、そのような機会がないままに、教壇に立っているのが現状です。若手の先生方や、教育経験の少ない企業から来られた先生方に、このような大学(特に本学)での教育力を身に着けていただくとうと企画した講座です。目的、狙いは次の3つです。

- ①学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- ②学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」について体験を通して学ぶ。
- ③ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

第2回目の講座では、ベストティーチング賞受賞者の木村先生(総合)と大栗先生(薬)から授業改善のポイントを話題提供いただき、学生へ向き合うスタンスを参加者全員で学び合いたいと思います。

年に一度の参加をお願いしているFD講演会の一環となります。皆様、奮ってご参加ください。(学生ファシリテーター・教職サークルにも参加を呼び掛けています)



担当:教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学大学教育再生加速プログラム（AP）事業

第25回 FDer 錬成会

2018 崇城大学新人教員FD研修会事業

第3回大学人教育力養成講座

テーマ：「ベストティーチャーから学ぶ」

日時：2018年12月8日（土）13時00分～18時30分

場所：SoLA2階アクティブ・ラーニング教室 対象：教員・学生

講師：梶川先生（宇宙）、柿木先生（情）

ファシリテーター：本田先生（株）LV、麻田先生（FD委員）

本学では、昨年度から、全学の教員、特に若手の先生を対象として、「大学人教育力養成講座」を開講しています。大学においては、教育と研究は車の両輪に例えられますが、近年、ステークホルダーから特に教育力が大学に求められています。しかし、アカデミアを目指す先生方は、学位の取得を通じて研究力は磨かれてきますが、教育力については、そのような機会がないままに、教壇に立っているのが現状です。若手の先生方や、教育経験の少ない企業から来られた先生方に、このような大学（特に本学）での教育力を身に着けていただこうと企画した講座です。目的、狙いは次の3つです。

- ①学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- ②学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」について体験を通して学ぶ。
- ③ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

第3回目の講座では、ベストティーチング賞受賞者の梶川先生（宇宙）と柿木先生（情）から授業改善のポイントを話題提供いただき、学生へ向き合うスタンスを参加者全員で学び合いたいと思います。

年に一度の参加をお願いしているFD講演会の一環となります。皆様、奮ってご参加ください。（学生ファシリテーター・教職サークルにも参加を呼び掛けています）



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）



崇城大学教育再生加速プログラム事業

第26回FDer錬成会

「コンピテンシーとコンピテンシーに基づく 薬学教育について」

日時

2019年3月18日(月) 9時30分～
11時00分

場所

崇城大学PH306 教室

対象

崇城大薬学部の教職員の方々

講師

株式会社リアセック 代表取締役 松村 直樹 氏

コンピテンシーとは薬剤師に必要な能力であり、単に知識や技術、態度にとどまらず、状況に応じて実際にできる行動を含む概念になります。これまでの日本の薬学教育では、GIO や SBOs を定義することで“何ができるか”を積み上げる教育方法となっていますが、“コンピテンシー”では、現場で個人が示す行動に焦点を当てており、活躍する場所において“どのように行動できるか”に焦点を当てて考えます。

今後の薬学教育を組み立てるにはこのコンピテンシーを理解することが重要になってくると思われます。そこで本講演では、コンピテンシーの概念またその薬学教育への応用についてお話頂きます。

主催



崇城大学

SOJO UNIVERSITY

お問い合わせは

崇城大学教務課 TEL:096-326-3406 FAX:096-326-3000

担当: 教務課 (内線1136 E-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)



崇城大学・熊本保健科学大学 大学間連携事業

崇城大学教育再生加速プログラム事業～第27回FDer錬成会～

平成30年度第1回FD講演会

「学習アドバイジングスキルを活かしたアクティブ・ラーニングの実践と
これからの大学教育に向けての異文化理解」

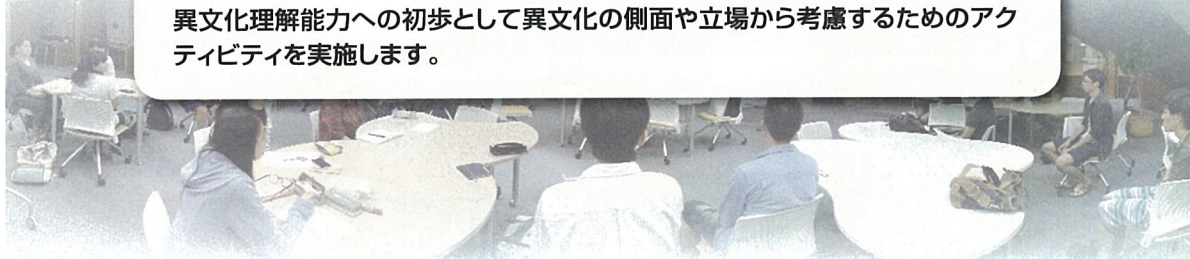
日時 2019年3月18日(月) 16時40分～18時10分

場所 崇城大学SoLAホール **対象** 崇城大・熊本大の教職員の方々

講師 崇城大学SILC 宝来華代子准教授 ディビットオストマン講師

今「アクティブ・ラーニング」(AL)の教育方法が、大学の教育現場において強く推奨されています。実際にあった薬学部の大学院生主催の学習会に関する相談ケースを例に、学習アドバイジングスキルのエッセンスを加えて、ALを様々な専門分野でどのように実践していくべきかを一緒に考えていきたいと思えます。

また、「異文化理解」の能力を育成することは、国際化における大学教育にとって欠かせないことであると思えます。異文化理解論という分野を紹介し、現代社会の状況における重要性と有用性を説明できればと思えます。最後に異文化理解能力への初歩として異文化の側面や立場から考慮するためのアクティビティを実施します。



主催



崇城大学
SOJO UNIVERSITY

お問い合わせは 崇城大学教務課 TEL:096-326-3406 FAX:096-326-3000
担当: 教務課 (内線1136 E-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)



崇城大学教育再生加速プログラム事業

第28回FDer錬成会

～航空整備学・学士力養成講座～

「社会が求める大学卒・整備士とは」

日時

2019年3月27日(水) 14時00分～16時00分

場所

崇城大学空港キャンパス
シミュレータ棟3階
多目的教室

対象

宇宙航空システム工学科の
教職員の方々

講師

日本航空株式会社 整備本部 業務部 部長
株式会社JALエンジニアリング 総務部 部長
林 浩一 氏

AIRBUS A350、Boeing B787…そしてMRJ…次々と新しい旅客機が登場しています。

技術の進展とともに航空機の整備方式やその整備士に求められるものも大きく変わりつつあります。

これからの整備士像とは？企業・社会が求める整備士とは…？そして我々、大学人が育てる整備士とは…？日本航空の最前線の視点から貴重なお話を頂きます。

主催



崇城大学
SOJO UNIVERSITY

お問い合わせは

崇城大学教務課 TEL:096-326-3406 FAX:096-326-3000

担当: 教務課(内線1136 E-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

Ⅱ - 5. 30年度の授業シラバスと学修到達度目標および SOJO ポートフォリオによる振り返り

科目名	医用工学				単位数	2	科目コード	L1221	開講期	後期																	
英文表記	Medical Engineering																										
担当教員	松下 琢	研究室	E302	オフィス アワー	火昼	メール アドレス	matusita@life.sojo-u.ac.jp																				
キーワード	臨床工学技士, 先端治療, 医用生体工学実験, 生体計測・機能代行, SOJOポートフォリオ																										
授業概要	<p>医療に関わる工学を総称して医用工学と呼び、現在の先端医療には必要不可欠のものとなっている。そこには生体計測装置学、医用治療機器学、生体機能代行装置学、医用機器安全管理工学などが含まれる。本講義ではこれらの学問分野の基礎となる工学の原理と生体との関わりについて、実例を紹介しながら講義を行う。また、講義を通して様々な医用工学上の課題に対応できる基礎能力と現象を数量的に捉えられる解析能力を養う。</p> <p>1. 将来、臨床工学技士を目指す学生は、必ず受講し、その業務内容などについて理解すること。 2. 3年の学生実験「医用生体工学実験」で実施する人工腎臓と人工肺について、その原理の基本的な知識を身につけること。 3. 毎回小テストを行うので、必ず提出すること。 4. 授業中に質問をし、理解度を確認しながら授業を行うので、質問には必ず答えること。 5. 15回の講義の中で、図書館の医用工学関連図書を指定し、レポートを課して、授業の発展学習を促すので、期日を厳守して提出すること。 6. 工学的な計算問題を解くことがあるので、電卓を持つてくること。</p>																										
教科書	MEの基礎知識と安全管理 改訂第6版 南江堂 (社)日本生体医工学会ME技術教育委員会 978-4-524-26959-4																										
参考書	入門人体解剖学 第4版 南江堂 藤田恒夫 4-524-21557-3																										
予備知識	生体に関する生物学的知識 医療機器に関する関心				<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">関連科目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="4">基礎科目: 化学 I・II、生化学 I・II</td> </tr> <tr> <td colspan="4">連携科目: 一般解剖学、一般生理学、医用生体工学実験</td> </tr> <tr> <td colspan="4">発展科目: 基礎生命科学IV(医学基礎)</td> </tr> </tbody> </table>							関連科目				基礎科目: 化学 I・II、生化学 I・II				連携科目: 一般解剖学、一般生理学、医用生体工学実験				発展科目: 基礎生命科学IV(医学基礎)			
関連科目																											
基礎科目: 化学 I・II、生化学 I・II																											
連携科目: 一般解剖学、一般生理学、医用生体工学実験																											
発展科目: 基礎生命科学IV(医学基礎)																											
DPとの関連	「優れた実践力をもつ生命科学の専門家となりうる、汎用的基礎力と生命科学に関する基本的な専門知識を身につけたもの。」に関連する科目である。 将来、臨床工学技士や、医療関係などの専門家を目指すための基本的な知識を身につけ、医療の現場での具体的な業務内容を理解する。				建築学科のみ	建築総合	建築計画	建築構造																			
JABEE記号	学生の到達度目標																										
	①	医用工学に必要な医学の知識を理解できる。																									
	②	心臓の構造と機能、心電計・心電図モニタなどの取扱いと安全管理について理解できる。																									
	③	血液浄化機器(人工腎臓)の取扱いと安全管理について理解できる。																									
	④	人工心肺装置などの取扱いと安全管理について理解できる。																									
	⑤																										
	⑥																										
評価方法(配点)	中間試験	定期試験	小テスト	レポート	成果発表(口頭・実技)	作品	ポートフォリオ	その他	合計																		
	70	0	10	10	0	0	10	0	100																		
評価明細基準	<p>1. 中間試験 2回行うので、35点×2 = 70点</p> <p>2. 小テスト 毎回行うので、15回分で10点</p> <p>3. レポート 図書館の医用工学関連図書を指定し、それを資料として課題のレポートを提出する。10点</p> <p>4. ポートフォリオ 「到達度評価ポートフォリオ」110点</p>																										
学修上の注意	<p>1. 電卓(指数関数の計算できるもの)を必ず準備すること。</p> <p>2. 小テストは、必ず提出すること。</p> <p>3. レポートは期限以内に提出すること。期限以後は受け付けない。</p>																										

授業計画

回数 (日付)	授業内容	授業形態	学習課題(予習・復習)	時間(分)
1回 (/)	テーマ オリエンテーション・医用工学概論 内容 医用工学について概説する。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.2～22を読んでおく。 【復習】小テスト①について記載し、次回の講義で提出する。	60
2回 (/)	テーマ 医用工学に必要な医学の知識 1 内容 人体の構造、血液、心臓などについて学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.23～28を読んでおく。 【復習】小テスト②について記載し、次回の講義で提出する。	60
3回 (/)	テーマ 医用工学に必要な医学の知識 2 内容 人体の構造、心臓、尿管系、刺激伝導系などについて学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.31～34を読んでおく。 【復習】小テスト③について記載し、次回の講義で提出する。	60
4回 (/)	テーマ 医用工学に必要な工学の知識 内容 電気工学、電子工学、機械工学などの基礎を学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】3回目に配布した資料を読んでおく。 【復習】小テスト④について記載し、次回の講義で提出する。	60
5回 (/)	テーマ 生体計測装置学 1 内容 心電計・心電図モニタの取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.148～160を読んでおく。 【復習】小テスト⑤について記載し、次回の講義で提出する。	60
6回 (/)	テーマ 生体計測装置学 2 内容 心電計・心電図モニタの取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.148～160を読んでおく。 【復習】小テスト⑥について記載し、次回の講義で提出する。	60
7回 (/)	テーマ 医用治療機器学 1・中間試験 1 内容 ペースメーカーの取扱いと安全管理について学ぶ。 中間試験を実施する。	講義 演習	【予習】教科書p.264～275を読んでおく。 【復習】小テスト⑦について記載し、次回の講義で提出する。	60
8回 (/)	テーマ 医用治療機器学 2 内容 除細動器の取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.277～288を読んでおく。 【復習】小テスト⑧について記載し、次回の講義で提出する。	60
9回 (/)	テーマ 医用工学に必要な医学の知識 3 内容 人体の構造、腎臓などについて学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.35～38を読んでおく。 【復習】小テスト⑨について記載し、次回の講義で提出する。	60
10回 (/)	テーマ 生体機能代行装置学 1 内容 血液浄化機器(人工腎臓)の取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.289～313を読んでおく。 【復習】小テスト⑩について記載し、次回の講義で提出する。	60
11回 (/)	テーマ 生体機能代行装置学 2 内容 血液浄化機器(人工腎臓)の取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.289～313を読んでおく。 【復習】小テスト⑪について記載し、次回の講義で提出する。	60
12回 (/)	テーマ 生体機能代行装置学 3 内容 血液浄化機器(人工腎臓)の取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.289～313を読んでおく。 【復習】小テスト⑫について記載し、次回の講義で提出する。	60
13回 (/)	テーマ 医用工学に必要な医学の知識 4 内容 人体の構造、肺などについて学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.28～31を読んでおく。 【復習】小テスト⑬について記載し、次回の講義で提出する。	60
14回 (/)	テーマ 生体機能代行装置学 4 内容 人工心肺装置の取扱いと安全管理について学ぶ。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.338～361を読んでおく。 【復習】小テスト⑭について記載し、次回の講義で提出する。	60
15回 (/)	テーマ 生体機能代行装置学 5・中間試験 2 内容 人工心肺装置の取扱いと安全管理について学ぶ。 中間試験を実施する。	講義 演習 AL	【予習】教科書p.338～361を読んでおく。 【復習】小テスト⑮について記載し、次回の講義で提出する。 「到達度ポートフォリオ」の作成	60
16回 (/)	テーマ まとめ 内容 総評、提出物の返却、出席確認	講義	「到達度ポートフォリオ」の入力	60

■ 科目の学修到達度レポート

学生情報

学籍番号
学生氏名

課題情報

科目名	医用工学(2生)
担当教員	松下 琢
提出/閲覧期間	2019/01/07 00:00~2019/02/16 23:59

内容

■ 科目の学修到達度レポート

医用工学に必要な医学の知識を理解できる。

(1)到達度

回答:

おおよそできる

(2)その理由を200~250文字で記してください。

回答:

医用工学の授業において、MEにとって必要な知識を学んでいく中で、今まで一般解剖学などで積み重ねてきた医学の知識の復習を私自身ができたと感じた上に、知らない知識もプラスαで知ることができた。また、MEで使用する機械を扱う上で、医学の知識をきちんと身につけていないと使用できないと痛感した。MEは具体的にどのような業務を行うかということや、機械の扱い方などの具体的なことを、実際に臨床工学技士の方から聞くことができてよかった。

(211文字)

医用工学に必要な工学の知識を理解できる。

(1)到達度

回答:

おおよそできる

(2)その理由を200~250文字で記してください。

回答:

授業で医用工学に必要な工学の知識を学び、理解をしたが、道具を教室に持ってきてくださり、実際に触れることができたので、仕組みがどのようなになっているのかを自分の目で確かめることができ、より一層詳しく知ることができた。また、自分の気になる医療機器というテーマを基にレポートを書くために、図書館で自ら調べものをしたことで、授業で学ばなかった医療機器についても知ることができた。主観的に捉えることと、客観的に捉えること、捉え方が違うだけで記憶の残り方も異なると思うので、自ら調べることができてよかったと感じた。

(250文字)

心臓の構造と機能、心電計・心電図モニタなどの取扱いと安全管理について理解できる。

(1)到達度

回答:

おおよそできる

(2)その理由を200～250文字で記してください。

回答:

心臓の構造と機能について改めて学び、その上で心電計や心電図モニタなどの取扱いと安全管理について知った。洞結節→房室結節→ヒス束→右脚、左脚→プルキンエ線維、この電位の変化を示したものが心電図で、1周期0.8秒の間にどのような波形を示すのか、P波、QRS波、T波、PQ時間がどのような意味を示すのか、それぞれの波形において、各弁で何が起きているのかということを知ることができた。植込み型心臓ペースメーカーへの影響を知ったときに、公共での自分の過ごし方に気をつけなければいけないと感じた。

(242文字)

血液浄化機器(人工腎臓)の取扱いと安全管理について理解できる。

(1)到達度

回答:

おおよそできる

(2)その理由を200～250文字で記してください。

回答:

MEの業務で最も多いのは透析業務ということで、血液浄化機器(人工腎臓)について詳しく学ぶことができた。人工腎臓の仕組みや中空糸型ダイアライザの構造、血液透析に求められる物質交換と分離、透析液と血液は向流となっており、物質移動において濃度勾配に従って拡散が、圧力勾配に従ってろ過が行われているということを知った。また、腎臓は再生できないので、治すことが非常に難しく、血液透析をする際は静脈側回路内圧を常に監視することが大切であるということがわかった。

(224文字)

人工心肺装置などの取扱いと安全管理について理解できる。

(1)到達度

回答:

おおよそできる

(2)その理由を200～250文字で記してください。

2019/3/14

ポートフォリオ

回答:

心臓手術の中でも特に、開心術で心臓と肺に流れている血液が遮断されている間は、血液は人工心肺装置で循環されるということで、MEの方の人工心肺装置の扱いが一人の命を大きく左右する結果に繋がるのではないかと私は感じた。テハモが開発した膜型人工肺は、生体の肺と同じように血液と酸素ガスを直接接触させるのではなく、薄い透過膜を通じてガス交換が行われているということがわかった。ハルスオキシメータで測定される動脈血酸素飽和度は人工呼吸器使用時や酸素療法の場合のモニターに重要だということを知った。

(242文字)

教員からのコメント:

Ⅱ－6. 30年度の広報活動：本AP事業のパンフレット作成

○崇城大学大学教育再生加速プログラムの取組みについて Vol.5



H30年度FDer練成会の活動実績(一覧)



H30年度は、下記のように7回のFDer練成会の活動を行いました。

- 第22回FDer練成会 2018/04/25
学習アドバイジングスキル講習会報告
- 第23回FDer練成会 2018/11/10
第1回大学人教自力養成講座「コミュニケーション力養成講座」
- 第24回FDer練成会 2018/11/19
第2回大学人教自力養成講座「ベストティーチャーから学ぶ」
- 第25回FDer練成会 2018/12/08
第3回大学人教自力養成講座「ベストティーチャーから学ぶ」
- 第26回FDer練成会 2019/03/18
「インビテンシーとインビテンシーに基づく薬学教育について」
- 第27回FDer練成会 2019/03/18
平成30年度第1回FD講演会「学習アドバイジングスキルを活かしたアクティブ・ラーニングの実践とこれからの大学教育に向けての異文化理解」
- 第28回FDer練成会 2019/03/27
航空整備学・学士力養成講座「社会が求める大学卒・整備士とは」

■ 本事業(取り組み期間:平成26年度～平成31年度)が最終的に目指す数値目標

具体的な実施計画における指標	H25年度(起算)	H28年度(実績)	H29年度(実績)	H31年度(最終)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合(科目数で算定)	8.2%	20.0%	21.0%	25%
アクティブ・ラーニングを導入した科目のうち、必修科目の割合	53.3%	61.0%	62.0%	70%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2%	92.9%	90.0%	100.0%
学生1人あたりのアクティブ・ラーニング科目受講数	0.87科目	3.70科目	4.00科目	2.20科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員の割合	25.9%	52.8%	63.2%	60.0%
学生1人あたりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学習時間	2.3時間/週	5.0時間/週	5.0時間/週	4.0時間/週
ファカルティアドバイザー数	0人	17人	18人	23人
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	0人	120人	167人	23人
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(約3,500人中)	200人	911人	899人	900人



本学の大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

本学独自の英語教育施設（SILC: Sojo International Learning Center）に併設した自律学修センター（SALC: Self Access Learning Center）では、学生が主体的に学修し年間利用者数が4年間で12倍に拡大しました。
このSALCのノウハウを全学に普及させ学生の自律学修のマインドを醸成するとともに、専門科目のアクティブ・ラーニング（AL）化を推進するために全学SALC/学科SALCを設置し、利用時間を可視化して単位の実質化を目指します。

平成29年度 大学教育再生加速プログラム特別講演会（第3回FD講演会）

2018年03月26日(月)平成29年度 大学教育再生加速プログラム特別講演会(第3回FD講演会)「テーマ:主体的な学びを醸成するポートフォリオ」を開催しました。今回は、「ポートフォリオ」とはどのようなものか、それを活用することで教育の質保証と質向上にどのような成果が期待できるのかについて、この分野の我が国の第一人者の先生方からご講演いただきました。プログラムは以下の2部構成で行われました。

PROGRAM

- 13:30 開会挨拶:崇城大学 学長・理事長 中山 峰男
- 13:35 挨拶:崇城大学 FD委員長 吉良 章夫

第一部:基調講演

- 13:40 基調講演[1] 岩井 洋(帝塚山大学)
「学びと教育を『見える化』するポートフォリオ～導入から運用上の課題まで～」
- 14:40 基調講演[2] 藤本 元啓(崇城大学)
「SOJOポートフォリオシステムの機能と役割～生徒から学生へ、そして社会人へ～」

第二部:パネルディスカッション ～主体的な学びの教育的しかけとは～

- 15:35 指定討論者 田中 岳(東京工業大学)
コーディネーター 喜久里 要(早稲田大学)
パネリスト 岩井 洋(帝塚山大学)、藤本 元啓(崇城大学)
- 16:25 閉会挨拶:崇城大学 副学長 松下 琢



平成30年度学生ファシリテーター研修会を開催



2018年05月19日、平成30年度学生ファシリテーター研修会を、図書館1階全学SALCにて開催いたしました。今回は、今年度の学生ファシリテーター(学生FC)と留学ファシリテーター(留学FC)による、傾聴に重きをおいた対話の場としました。

個人ワークのあとは、班でのグループワークを行いました。

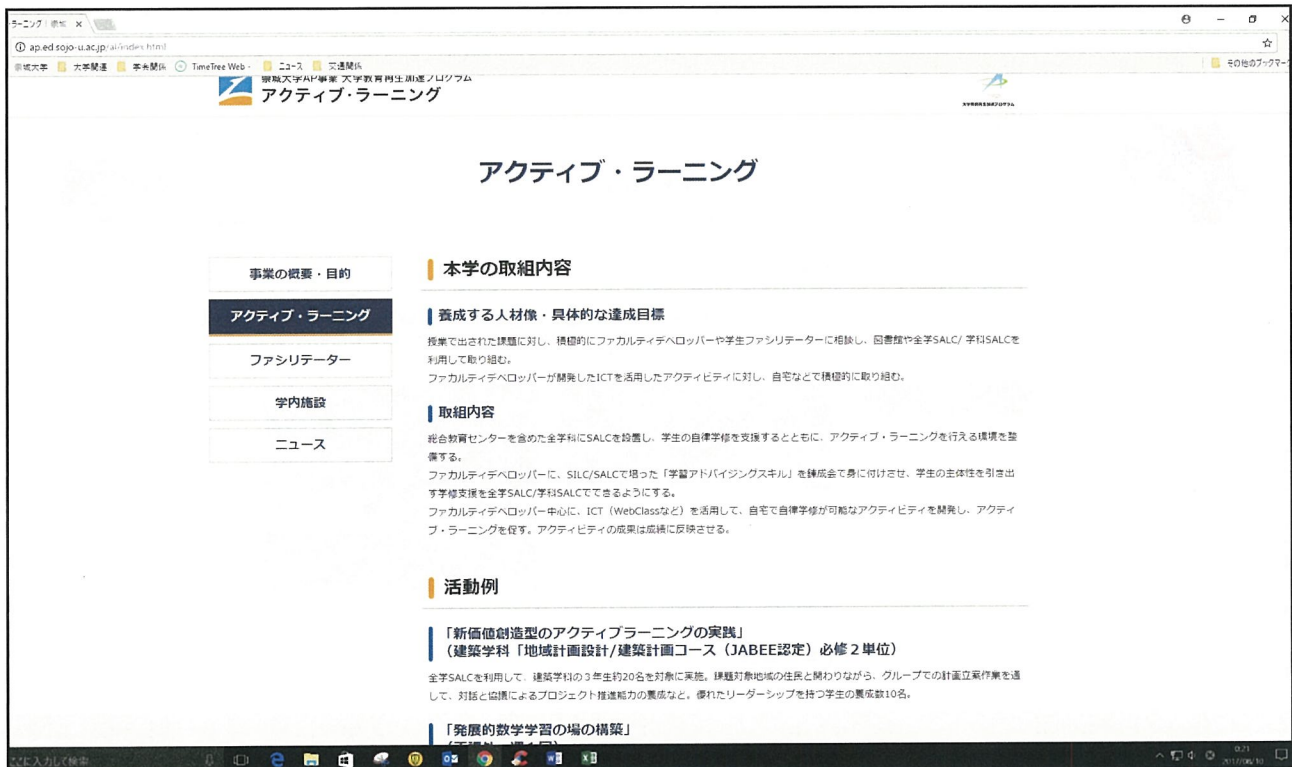


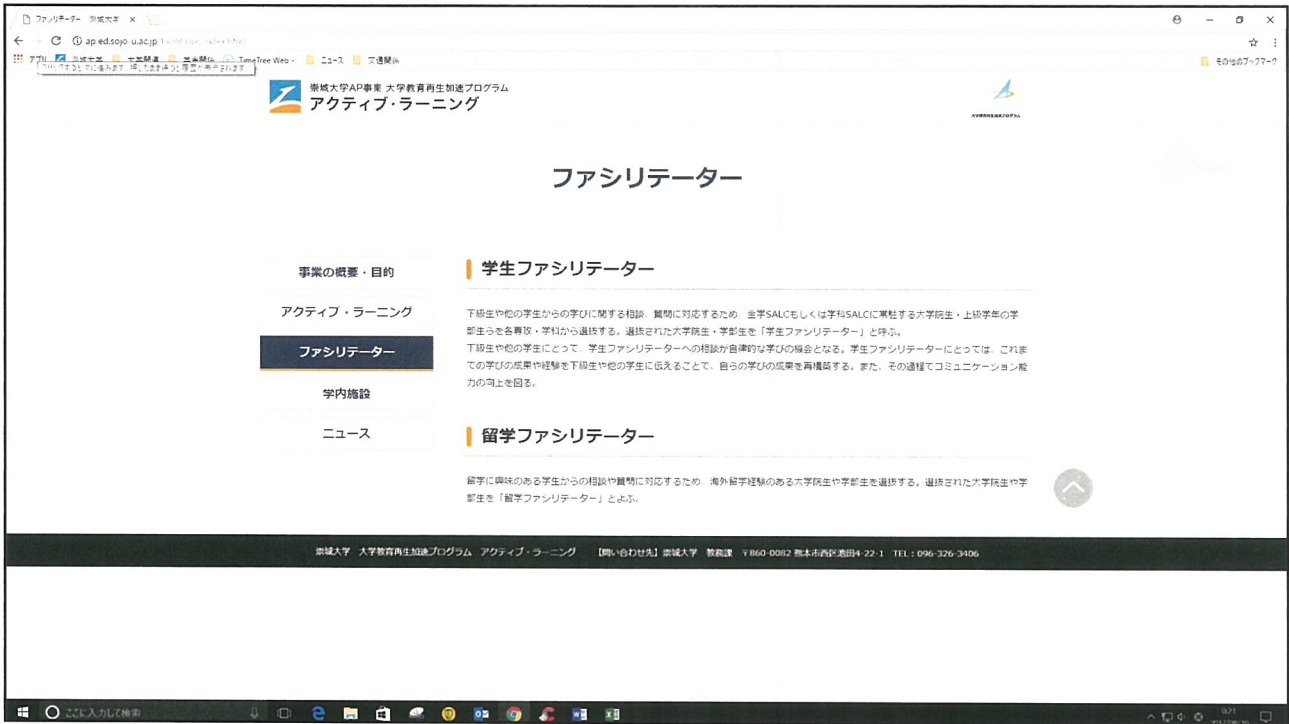
まとめとして、学生全員がそれぞれの班での感想を伝え、合わせて「私のスローガン」の発表を行いました。



Ⅱ-7. 30年度の広報活動：大学ホームページへの本AP事業のページ作成

28年度より、大学HPにAP事業のサイトを開設した。 <http://ap.ed.sojo-u.ac.jp/>





崇城大学（中山峰男学
長、熊本市西区）の大学
院生が社長を務める株式
会社Ciamo（しあも
..代表 古賀碧）がこの
ほど、起業・事業をスタ
ート。熊本の農業・水産
業の未来を明るく元気に
する事業展開で、崇城大
学ファンドSOJOスタ
ートアップラボ株式会社

バイオビジネス起業

球磨焼酎粕を活用

崇城大の大学院生が社長

からも出資をうけた。
焼酎粕を利用した光合
成細菌の研究成果を基に
九州内一五箇所の実証実
験が進行中で、さまざま
な成果を出している。す
でに、四〇の農家で利用
されている。直営農場を
持つ大手企業への導入の
依頼も進行している。
また、Ciamoは崇
城大学公認「起業部」に
所属し、チームCiamo
oとしてこの二年、全国
各地で開催されるビジネ
スプランコンテストに複
数優勝しており、その事
業プランは各方面から高
い評価を受けている。
Ciamo（しあも）
の事業内容は、球磨焼酎
粕で培養可能な光合成細
菌を活用したバイオビジ
ネス。焼酎粕はコストを
かけて処理されているの
が大きな課題となってい
る。焼酎粕で培養可能な
光合成細菌を大量に培養
できるキット（くまレッ
ド）の製造・販売からス
タートしており、五年で
一〇億円の販売を見込ん
でいる。

2018年5月16日 教育学術新聞 P.4

大 崇
城 大
学 発
ベンチャー C i a m o 始 動!
焼酎粕利用した商品販売



Ciamoのメンバーたち

株式会社Ciamo(古賀 碧社長(崇城大学院工学研究科博士前期課程)は、崇城大学のフ

このたび事業をスタートした。五月十日、同大学で開催された記者会見で発表した。

同社の事業は、球磨焼酎粕で培養可能な光合成細菌を活用したバイオビジネスの展開。この焼酎粕で培養可能な光合成細菌を大量に培養できるキ

ツト、くまレッドを開発し、昨年六月から県内の農家に直接販売。五年で一〇億円の売り上げを見込んでいる。

光合成細菌は、農水産業分野や医薬品、環境問題への解決など広く注目されている微生物であり、「高価」とされる一方、付加価値の低い焼酎粕はコストをかけて処理されているのが大きな

課題となっている。そのため、この焼酎粕を光合成細菌の培養に使用することで従来よりも安価に提供し、農水畜産業をさらに発展させることができるとしている。

同社はこの事業を通して、焼酎粕の処理にかかるコストをゼロにし、蔵元の負担を減らすと共に、環境保全を行い安心安全な食を世界中の人々に届けることを目標に掲げている。Ciamoは、「Ciao II しあ・わせをCiao II もっと・幸せをもっと」を実現させる事業に由来している。

(株)Ciamoは崇城大学公認の「起業部」に所属し、メンバーはチームのi-am-oとしてこの二年、全国各地で開催されるビジネスプランコンテストに出場、複数優勝しており、その事業プランは「文部科学大臣賞」を二度も受賞するなど、各方面から高い評価を受けている。

中山峰男学長は、「これから起業を目指す学生の目標になってほしい」と期待を語った。記者会見には、起業部の学生たちが立ち合い、熱い視線を向けていた。

Ⅲ－２．「教職希望学生が学修サークルを立ち上げ現役採用試験合格者輩出」

教員採用試験の現役合格を目指す学修サークル「教職サークル」が27年度より立ち上がりましたが、30年度は、本学の同窓会組織の崇学会（教職OB会）と共催で、2018年7月7日（土） 中学、高校で教員をしている崇城大学卒業生と、教職を目指す現役学生たちが交流を深める「教職交流会」を開催しました。この会に、教職サークルから現役で教員採用試験に合格した先輩がプレゼンテーションを行いました。

また、2018年8月28日～29日にかけて、あしきた青少年の家で、崇学会と教職サークルメンバーの夏合宿が行われました。

SOJO UNIVERSITY

**崇城大学**
SOJO UNIVERSITY

崇城大学AP事業


大学教育再生推進プログラム

● AP事業によって学生の方起こった変化（教職サークル発足）

2015年9月 全学SALCを利用した学生の自律学修サークルが立上げ

博士2年から学部1年まで、
教職（工業・情報・理科・美術）
を目指す学生が、自主的に
学修するサークル



精進授業って
どんな感じ？

現役で通れるか不安...

一人よりも皆
で学びたい！

皆で頑張り、高め合おう！！



 SOJO UNIVERSITY



46



崇城大学 大学教育再生加速プログラム 運営委員会

〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1

TEL:096-326-3111(代) FAX:096-326-3000